

中原ミズキがスパダリ男装美女にレズ堕ちする話

あんみつ炙りカルビ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遂にあの中原ミズキに春が来た！

高身長、金持ち、イケメンという優良物件！

しかし、唯一の超えられない壁——女性という事だけを除いて。果たしてミズキは完全にレズ堕ちするのか！

はたまた別れて他の男性を探すのか！

ぶつちやけ、リコリスは百合はあるのか！  
これはそんな物語。

## 目 次

中原ミズキがスパダリ男装美女にレズ堕ちした件	1									
もう、彼女のことが忘れられない										
ボクの初恋を君に捧げる										
君と夏の終わり、将来の夢——結婚したいなあ										
貴方のキスを数えましよう										
君がいた夏は遠い夢の中										
空に消えていった、打ち上げ花火										
そばにいるだけで、なんか幸せだつたな										
開け放たれた蒼すぎる空、一粒の涙										
愛を込めて花束を										
W a l k i n g w i t h y o u										
81	71	62	55	48	41	32	25	18	10	1

# 中原ミズキがスパダリ男装美女にレズ堕ちした件

「やあ、お待たせ。中原ミズキさんだよね？　今日は一緒に楽しもうか」

「あ、は、はい!!　椿さんですよね！　よろしくお願ひします！」

噴水が似合う街中の広場、月明かりが湧き上がる水に反射して、キラキラした光を広げる待ち合わせスポット。

現に待ち合わせの人達が行き交う中で、彼女は初対面の待人と会う。

（キタアアあアアアアアアアアアアアア!!　私の春！　千束にたきな、くるみまで馬鹿にしよつて、見たことか！　これが、私の終着点！）

藍色の滑らかな髪を右側に編み込み、ショートカット、真珠のようなきめ細やかな肌との色合いのバランスが月明かりに映える端正な顔立ち、180近い高身長に彼女——中原ミズキは心中で歓声を上げた。

「初対面なのに、夜に誘つてごめんね？　本当はもつと昼間に会いたかつたんだけど」

「いえいえ、全然！　それより外なのも何ですから、何処か行きますか！　あつ、お酒とか、どうです？　この辺り結構詳しくて——」

申し訳なさそうに伏せたまつ毛も映画俳優のように様になつていて、うつすら覗く華奢な鎖骨と光るネットクレス……下手したら給料1ヶ月分のブランド物に目が眩む。

そんな相手に気を遣わせないように、ミズキは自分のおすすめの店を上げようとして、全てがデートで行くような場所ではない居酒屋ばかりなのに、閉口。

すると、相手はまるで自然に物を取るかのようにミズキの手を取つて、悪戯っぽい笑みを浮かべて

「まだお酒には早いかな。どうだろう、ミズキさんが良ければ。夜でもコーヒーが飲めるカフェがあるんだ。人は少なくて、ソファはふかふかだよ？」

「え、あ、じゃ、じゃあそれで……」

あまりの顔立ちの端正さにまるで魅了されたかのように、するりと手を握られて、そのまま引かれた先に連れて行かれたのは、純朴な空氣を纏う喫茶店。

中に入れば、老店主がいるだけで本当にお客様は少なくて。けれどよく清掃がされた調度品と、年季が入ったカウンターや壁の色はミズキが働く喫茶店とはまたちがう安心を覚えさせた。

「お手をどうぞ、ミズキさん」

「あ、ありがとう……」

手を引かれて、まるで童話の姫様のように椅子を引かれて、座つてしまつた彼女の対面に彼が座る。ここまで扱いからしてだいぶ女性に手慣れてはいるが、感じる空気から下品さを感じない。

どこまでも綺麗で透き通つた優さと、杏仁豆腐のような甘い匂いにミズキは酔つたように目が眩む。

「出会つてくれて、ありがとう。今日は帰るまでずっと笑顔にしてあげるから」

頬に熱が上がつて行くのを感じる。彼の言葉全てが、スポンジに吸い込まれる水のように入つていく。

まるで酔つた拍子に見る夢のようなその時間に身を委ね、彼女は溺れていき——気づけば、翌朝を自室で迎えていた。

\*

「というわけよ……いや、マジで私の旦那様見つけたわ」

「寝言は寝てから言えよ、酔っぱらい」

「千束の言う通りです。恐らくミズキさんから情報を抜く為に近づいたハニトラ要員の可能性があります」

「たきなの口からハニトラつて言葉が出るとは思わなかつたなあ……」

リコリコ喫茶店。中原ミズキが働く知る人ぞ知る名店……表向きは。裏側は日本の平和神話、それを維持するためだけに結成された秘密組織。

主に女子高生に扮した暗殺者による事前除去『リコリス』と呼ばれる暗殺支部である。そのカウンターにて酒を飲みながら、ひたすらに1ヶ月分惚氣ているのが、裏方担当……中原ミズキである。

「だつてさあ！ やることなす事150点なんだぞ！ 支払いは全部彼持ちで、車もレクサスとかアウディとかの高級車！ おすすめしたお店にハズレはないし、エスコート完璧！ ドラマの主人公かよ……」

「なんで、そんな人がミズキを好きになつたんだろうね……」

「ダメな女がタイプだつたんじやないですか？」

「黙れ、ガキンチヨども！ せいぜい私がハワイで挙式を上げるのを楽しみに待つてるがいい！ 今日こそは、体の関係まで行つて、既成事實作つてゴールインじやい！」

「ミズキ、飲み過ぎだ。そろそろ酒を抜いておけ。酒臭い女と幻滅されたくないだろう」

「というか、仕事しろよミズキ。なんでボクの負担が増えてんだ」

「諦めなよ、くるみ。どうせ近い内に振られるからさ」

スッと、酒をくるみに渡してカウンターから店長であるミカのコーヒーを飲み始めるミズキは働く意志が見えないほどに浮かれているので、千束も肩をすくめて給仕に戻る。

まあ、偶には浮かれるくらいはいいかと長い付き合いから許しているのだから。

\*

甘い匂いが鼻を過るが、くどくはない。普段の呼吸より少し長めに、水がブクブクと音を立てるくらいの強さで吸うようにと椿が教えてくれるので、ミズキは吸う。

「けほ……凄いわね、これ」

「シーシャは慣れないと、ちよつときついかもね。でもお酒を飲みながら、ゆっくりとこれを吸うのが結構好きなんだ」

成人になつてから、偉い人から煙草勧められることが増えたが、そ

の度に裏方の仕事で強く断つてきた。匂いがつくのは暗殺者にとって厳禁、だから彼のシーシャの誘いにちょっと興味が湧いたのだ。

だからって、情報担当とはいえりコリコ喫茶店一員の端くれ。煙草など買うなんてもつてのほかだ。ミズキもコンビニではお酒しか買わない。とはいえ気になるのでお気に入りの店で初体験と洒落込む。「ミズキさん、無理はしないでね？ 普通の煙草に比べればマシだけど、体に害がない訳じやないんだ」

「は、はい！ 確かに喉がイガイガしてきたかも。私はもういいかな。すみません、シンデレラください」

既に酒は抜けているが、普段の酔いどれを隠す為にノンアルコールカクテルを傾け、椿がシーシャを吸う姿に目を向ければ甘い香りが届く。それは彼がつけていた香料からではない。

「そのシーシャ甘い匂いがするわよね」

「ああ、煙草の匂いを漂わせるよりも幾分かいいだろう？ 本来は煙草 자체ご法度なんだけどね。仕事柄」

椿は目を閉じ、これ以上美味しいものは無いかのようにゆっくりと丁寧に煙を吸い込んでいく。あまりにも美味そうに吸う椿を、他に見るものはないミズキはまじまじと見ていて。

ゆっくりと吸い込み吐き出された紫煙と共に、ふわりとしたバニラの香りが2人の間を縫うようにして広がつていった。  
——煙草を吸う姿が綺麗だと思つた。

すばすばとせわしなく吸う者や、ぼそぼそと背筋を丸めて吸う者を見る度に、私は煙草を吸う姿を好ましいとは思えなかつた。

吐き出す煙の匂いが染み付く以上に、その姿が見つともなく、『汚い』とさえ思つていた。だが、椿は静かに、ゆっくりと紫煙を吐き出す。

時間にせつつかれているわけでもなく、煙草に飢えて飢えて仕方がないというわけでもない。

何となく、吸いたくなつたから吸つている。さり気無く。

「好きだなあ……」

彼の姿に思わず洩れた言葉、それに気づいて慌てて口を塞ぐが、意

地悪そうに笑つた彼を見て聞こえていた事を察する。

「いや、あまりにも椿さんの姿がかっこよくて、つい――」

「ミズキ」

取り繕うような言葉を遮るように、私の顔にシーシャの煙を浴びせられる。その意味を知つてか、知らずか、少なくとも私は知つていて。「お会計を」

彼は私の頭を撫でて、お会計へ足を進ませる。残された私は帰つて来るまで、顔から熱がひかなかつた。

熱に浮かされるまま、時計を見る。もう終電なんて過ぎていた。

\*

「適当に入つたけど、綺麗でよかつたね」

「ほ、本当に適当？ 結構遊び慣れてるんじやないの？」

「遊び慣れてるのは本当……でも、この辺りは初めてかな。ミズキと一緒に緒だよ」

案内されたホテルの一室にて、腰に手を添えられて部屋の中心にあるベッドに腰掛ければ、朝露のような透明さを携えた鳶色の瞳がミズキを覗き込んでいて。

腰から登つた手が頬に添えられる、男性とは思えない華奢な指先に自らの指を添えて、ミズキは震えながら目を閉じる。

その眩さに目が眩まないように、これから起きる事に卒倒しないようにな。

「いい子だね、ミズキ」

熱を持つた柔らかさがミズキの唇に伝わる。仕事ばかりで恋愛なんてまるでしてこなかつた彼女に対して、まるで劇薬のような熱。

それをわかっているのか、下唇を啄むような浅い口付けで、ミズキの緊張を解くように吐息を交わして行く。

「もつと委ねるように、力を抜いて……大丈夫、怖くないよ」

交わす言葉に記憶が遠くなる、口元で揺らいだ言葉が甘く耳元で囁かれ、脳髄から快楽物質が生み出されて行く。あまりの体験に少し、

落ち着きたいと距離を取ろうとして、  
むにゅ

「——うん?」

ミズキは椿の胸元を押した瞬間、何かに違和感を感じた。

人間、めんつゆが入ったコーラのペットボトルを口に含んで想像と  
違えば噴き出すように、彼女の現実と認識で差異が発生する。

ミズキは思考停止したまま、もう一度強く押す。

椿の胸元は彼女の圧力を柔らかく受け止め、跳ね返す。まるで水風  
船のようなハリと柔らかさが何かに押し潰されているようで、  
「……ねえ、つかぬ事をお伺いしたいんだけど」

「何かな、ミズキ?」

「スリーサイズはおいくつ?」

「上から88 59 83のFカップだけど?」

遠のく意識が急速に覚醒、快楽物質が打ち止められ、意識がどんどん  
人はつきりクリアになり、ミズキは混乱のまま、椿が来ていたシャツ  
を引きちぎれば、

「ミズキ、意外と情熱的なんだね……攻め気質かな?」

「私は同性愛者じゃねえんだよ!!」

照れた椿の下から出てきたのは男性だつたら涎を垂らすこと間違  
いなしの美しい肢体。彫刻品のように完成された、その肉体に不覚に  
も心臓がときめいたが、それはそれ。これはこれ。

「騙されたああ…………この詐欺師め～訴えてやる…………訴えてやる!

「つて何脱いでんだ! 服を着ろ!」

男性だと思つていた分、ショックが大きく、ミズキはベッドの上で  
崩れ落ちてしまう。怨嗟の声を漏らすミズキに椿は引きちぎられた  
シャツを脱いで、水色の下着姿に。

「悲しいのかい? ミズキ? おっぱいでも揉む?」

「自前のがあるからいらねえよ!! つか、そうじやねえだろ!」

あまりの現実にツツコミにまわざるを得ない、ミズキを慰めるよう  
に頭を撫てる椿の手を払い除けるミズキ。

対して椿は割と余裕ありげに微笑んで、

「おや、僕はてっきり同性愛者かバイかと思つていたんだけど……違つたかな？」

「当たり前だわ！ 何が好きで女にファーストあげなきゃ行けないのよ！」

「そこまで言われるのは流石に心外だなあ……ミズキの為に今まで色々してきたのに。別れたいの？」

「至極当然だつての！ 私はね！ 男が好きなの！ イケメンで金持のね！ でもアンタは女の癖にイケメンで、金持ちで、エスコート完璧で……何で、性別が女なのよお……！」

「わあ、理不尽な怒り」

ぽかぽかと殴り始めたミズキの両手を掴んだ椿は、彼女をベッドに押し倒す。先程とは違うとはいえ、顔立ちちは男性に負けず、色っぽくて優い美少年……視界にちらつく柔そうな胸さえなければ、

「別れてもいいけど、きつとミズキは僕を忘れられないよ。断言する。今までだつて、そうだつた。よく考えてみて、ミズキ。お金があつてイケメンなパートナーがこの先、自分の人生で現れると思う？」

うぐ、と言葉に詰まるミズキ。確かにそうだ。欲しいものはなんでも買ってくれて、毎日完璧なエスコートに、仕事場には訪れない配慮。その上、イケメンで高身長なパートナーができるかと言えば、可能性はゼロに近い。

「だからさ、1回。初回のサービスつて事でどうかな。1回だけ、互いの相性見るのは。勿論、嫌なら嫌で構わない。お帰りいただいても構わないし、連絡先も消すよ」

「1回つて、つまり……」

「勿論、下の初めても残してあげる。それ以外は僕が初めての相手になるけど、どうかな？ 嫌？」

ミズキの中でこれ以上ないくらいに思考が回転する。相手は女、女なのだが……それ以外の点が、これ以上ないくらいにミズキのタップなのだ。だからって女相手に抱かれるのは、流石に社会の目も考えて……

「いや、店長が同性愛者じゃん、うち」

すっと出てきたミドルな店長。かつて酒の席で男性が恋愛対象だと聞いた覚えがあつて。そもそもリコリスで女同士の恋愛なんて珍しくもない。偶に無線越しに乳繰り合う声が聞こえて、管制室を虚無に追い込んだことくらいあるのだから。

「じゃあ、問題ないって事でいいのかな？」

馬乗りになつた椿の整つた唇を舌が舐める。その妖艶さに無意識のうちに唾を飲み込んでいたミズキは彼女の影が自分を覆う瞬間に、期待するように目を遮るように視界を閉じて、

「——天国に連れて行つてあげる」

\*

「えっ!? お相手、女性だつたんですか!?

「うわあ……そういうパターンか」

後日の喫茶店にて、カウンターに突つ伏したミズキから事のあらましを聞いたときなは目を見開き、千束は呆れたようにため息をつく。「リコリス同士の恋愛は珍しくなかつたですからね……偶に改名して、パートナーと同じ苗字にしてる人もいましたから」

「そうそう。新婚空気を楽しんでたりね。まあ、そいつ二股かけてて修羅場になつた奴もいたけど」

「リコリスつてそんな百合百合の世界なのか?」

「外に出逢いはないし、戸籍ないから結婚も無理。つてなると意外とリコリスOG達はパートナーでできてる事あるんだよね」フキも私も何回か告白されてたりするし

千束が遠い目をしながらかつてを思い返すので、質問したくなるみがマジかよ……という日で店長を見るが店長自身も同性愛者なのもあつて曖昧に頷くだけだ。

「話を戻しますが、ミズキさんはどうするんですか？ 別れるんです

か？」

「まあ、 そんなんじゃないの？ ミズキは別に同性愛者じゃないし」  
とはいって、上手くいきそうだった出会いが台無しになつたと考えればミズキ自身にとつて笑い話ではない。千束もそれがわかっているのか、励まそうと近づいたところで、彼女の異変に気がついた。

「やばかつた……最高すぎた……別れられるわけないじやない

……！」

息が荒い。まるで思い返すかのように彼女は自分を抱きしめる。  
残された温もりを感じるように、忘れないように思い返すようにして、彼女の瞳に熱が灯る。

「あ、あの？ ミズキ？」

「もう無理……私、あの人と付き合つて、結婚する！ ハワイで同性婚を決めるわ！」

「ミズキ!??」

「おめでとうございます。ミズキさん。私達は海外には行けないのでお気持ちだけ包みますね」

「たきなまで!? 止めなくていいの!? ねえ、先生!？」

「千束、恋愛は……自由なんだ」

「ちよつ、いいの。それで!? ちょ、まつ、えええええ!？」

もう、彼女のことが忘れられない

『レディースアンドジェントルメン!! 今宵は我が舞台へようこそ!  
心ゆくまでこの夢の世界——存分に味わつていきたまえ』

「……ミズキの言つてる椿つてこの人だろ?」

「えーと、なになに、『ソーサラー・カメリア』?」

とあるリコリコ喫茶店の休憩時間。風呂に入つていたクルミを引つ張り出した千束が依頼したのは、ミズキの恋人である椿の身辺捜査だった。放つておけばいいのに、と愚痴るクルミを甘味を取りで調べ上げたのが、上記の映像。

そこにはマスカレイドマスクを身につけた純白を基調とし、藍色と紫という落ち着いた色を纏わせた礼服に身を包んだ彼女が、外国……それもかなりの大きな舞台で挨拶している。

「ソーサラー・カメリアって確かマジシャンですよね? 爆破マジックで全世界を沸かせた世界に名を馳せるマジシャン。エリカが興奮して話してました」

「たきなの言う通りだな。年収700万」

「700万? 大金持ちではない? 見栄張つてるの?」

「……単位はドルだ。日本円だと、ざつと7億」

「7億! 有名パンケーキが死ぬほど食べられるじやん!」

「それだけあればリコリスの装備も上げられそうですね」

「たきなりコリスから一旦、離れなく」

D Aに後髪を引かれつつある、たきなを戻そと千束が揺さぶる中でくるみは黙々とスクロールをしていき、ある場所を拡大、読み上げた。

『ソーサラー・カメリア。1年の休業発表。マジシャンとしての見聞を広める為に、初心に帰ろうと日本へ』つて書いてあるな。良かつたな、千束。ミズキの春は後、半年くらいらしいぞ

「……何というか、やっぱリミズキつて間が悪いというか

「まあ、経験になるのならないのではないでしようか。それより千束、休憩時間終わりですよ。戻つてお仕事です」

「うええ……まだ休みたいのに！」

我儘言う千束をたきなが引つ張つていくのを見送つて、クルミは自分の端末で更に検索をかけていく。暫くして、彼女は集めた情報を整理するかのように、呟いた。

「…………なんで、『ソーサラー・カメリア』になる以前の経歴が出てこないんだ？」

\*

「——んつ」

耳に痛いスズメの囀り、目に痛い朝の光を受けて椿は剥き出しの胸を放り出してベッドから起きれば、朝の冷えた空気に漸く思考が追いつく。

「まだ夜明けか……」

彼女やミズキに早起きは三文の得という概念はない。少なくとも二度寝に勝るほどの価値などない。それは例えば。

「うーん」

(寝てるのに眉間に皺が寄つてるね……)

一日中、肩を並べてソファでゲームをしていれば、気がついたら眠つているような。うつらうつらと腕の中でその温もりを感じながら二度寝する幸せには替えられない。だが例外も希にある。

今も自分が抜け出したベッドで涎を垂らしている彼女の寝顔を眺める事。寝起きの悪い彼女にはリアな光景。傷だらけの腹部を隠すようにシーツを巻き付け、渴いた喉を潤す為に飲み物を取りに行く。

台所にあるボクからプレゼントされた珈琲豆をミルで挽き、お湯を注いで朝焼けの珈琲を持っていく。

慣れ親しんだ香りと味、10代の頃から何も変わらない味だけど自分の味覚だけは歳を重ねた分、味わいを覚えていて。

「おはよう、ミズキ。よく眠れた？」

「…………う、ん」

寝ぼけた彼女の額にキスをして、布団から体を起こした彼女にコーヒーを差し出すが、彼女は一口二口飲むとまた夢の中へ旅立ってしまう。

仕方ないとはにかんで、椿は散らかった下着を洗濯機に入れてミズキの下着を見て、少しの間、思考を止める。

（これは…………手洗いかな？）

ミズキの紫の勝負下着…………向こう側が透けて見えるネグリジエを洗濯籠に入れて、キツチンへ。時計を見れば、ミズキが喫茶店に勤するまで時間はない。

なるべく、早めに食べられて、腹持ちのいいものを冷蔵庫を漁つてみるが、出てくるのは胡瓜や生ハム、賞味期限切れかけの卵に鮭フレーク。見事に酒のつまみになるものばかりで笑ってしまう。

とはいって、ありきたりのもので朝食を作るのも出来る男の流儀だ。自分は女だが、それはそれ。カフェエインが効いてくるのは30分後、その頃にはきっと起きてくると思つて。

「さてと…………始めるかな」

お湯を沸かして、卵を入れて70度を維持して、次の工程へ。一口サイズに切った胡瓜に生ハムを巻き付けて、爪楊枝を刺して、冷凍庫から米を取り出し、レンジでチン。

米が解凍された頃に、卵を取り出して殻を割れば、見事なタイミングで温泉卵が完成。ペットボトルのお茶を用意して、解凍した米を茶碗に盛り付ければ、バタバタと廊下を走る音がして。

「おはよう!! 遅刻!」

「朝ご飯食べていいきなよ? 食べたら送つていくからさ」

乱れた髪を手櫛で整えつつ、裸に引っ掛けただけの上着のままキッチンに飛び込んできたミズキを窘めるようにいえば、彼女は時間と食事に葛藤し…………大人しく席に着いた。

「時間がかかるないものにしたよ。ご飯は鮭フレークでお茶漬けにするといい」

「冷蔵庫には何もなかつたはずなのに…………マジシャン?」

「そうとも。今はミズキ専属のエンターテイナーさ。さあ、お箸をどうぞ。子猫ちゃん？」

キティと呼ばれたミズキは照れ隠しをするように、生ハムと胡瓜の巻物をせつせと口に運んでは、簡単ながらその美味しさに目を輝かせる。

「胡瓜の浅漬けも塩味みたいなものだからね。塩つけある生ハムと合うんだ。簡単だし、酒のつまみにも向いてるよ?」

「本当に助かる…………!! もう、美味しすぎて体重増えるく!!」

温泉卵をするすると食べて、鮭茶漬けを5分でかきこんで自室に戻つて彼女は今日着ていく服をクローゼットから漁りつつ、姿見に自分の姿を写して、

「ちょっと待てやああああああああああ!!」

「おや、どうしたかな。ミズキ? 今日のお弁当はクラブハウスサンドだよ?」

「わーい、大好きー! じゃねえわ! あれだけき、き、キスマーケつけるなつて! 言つたわよね! 仕事だからつて!」

「背中にしかつけてないよ? それにミズキも嬉しそうだつたしどだよ?」

しゅんとした悪戯が見つかつたような子犬のような目に、ミズキの心中が荒れ狂う。もうこのまま押し倒して、イチャイチャしたいのだが、仕事という生きしていくのに必要な物が邪魔をする。

「う、ぐう…………だ、だめじやないけどおゝやつぱり、人の目が、ね?」「わかつた…………今度から気をつける」

かろうじて、湧き上がる欲望を理性の蓋が押しとどめて、今すぐにでも抱きしめて首筋に顔を埋めたいのを我慢。何とか着替えを済ませて、車に向かう。

ミズキの住む近くに止めたアウディの助手席に乗り込んで、フロントミラーを使って急いで化粧。流れるのはラジオで、昨日の地下鉄が脱線したという事故の話を耳にする。

「おつかないわね~椿も氣をつけなさいよ? アンタ、意外と抜けてるんだから」

「ははは、肝に銘じとくよ。危ない場所には近づかない。それで痛い目を見たことがあるからね」

他愛ない話、なんて事ない穏やかな日々、それを理解するたびに頬がだらし無く緩んでいくのを両手でむにむにと握りつつ、何とか保とうとするが、

「どうかした？ ミズキ？」

彼女に呼ばれる度に、胸から暖かさが伝わって背筋を心地よい痺れが走る。好きな人に名前を呼ばれる、それがどれだけ幸せな事なのか、画面越しの恋愛に冷え切つた言葉をぶつけていた自分が馬鹿らしい。

恋愛が、こんなに日々を楽しくするなんて知らなかつた。

男性だつたらもつとよかつたけれど、女性じやなかつたらこんな来世の運まで注ぎ込んだ完璧なパートナーとは出逢えてなかつただろう。

（神様、運命つてあるのね……）

千束が見たら、指をこめかみに当てるくるくる回し、弾いた素振りをするくらいにはミズキは浮かれていた。

「着いたよ、ミズキ。今日も頑張つてね」

「ありがと。今日、椿はどうするの？」

「街をぶらついてるよ。終わつたら、連絡して。迎えにいくから」

見事なまでの尽くしつぶりに、ミズキは空を仰ぐ。私のパートナーが最高に素敵、今日も頑張れるとばかりには。

ただ、それは彼女だけであつて、

「——ミズキ」

「何、どうした——」

開かれた窓越しに名前を呼ばれて、近づいたミズキの唇に淡い熱としつとりした感触が残され、思わず動きを止めたミズキに椿は寂しそうに笑つて。

「……充電、だつたけど。満タンにはならなかつたみたいだ」まるで魚が空気を求めるように口をぱくぱくさせるミズキに対して、彼女は目を伏せて、

「早く……帰ってきてね。僕の子猫」

窓を閉じて、車を走らせた彼の耳は僅かに赤く染まつていて。

それ以上にミズキの耳から頬は茹蛸のように真つ赤になつていて。

「おはよう～ミズキ…………どしたの？ 热でも出た？」

すれ違うようにして、走つて来た千束はマネキンのように突つ立つたままのミズキに声を掛ければ、ミズキはふらついたまま喫茶店の扉を押して、

「千束……私は子猫だつたわ」

「そつか……行こつか、病院」

千束は慈悲を浮かべた笑みで理解を諦めた。

\*

「私は結婚していたわ」

「たきな～119～脳味噌を取り出してほしいつて言つておいて」

「自分で連絡してください、千束」

昼休み、手製のクラブハウスサンドを食べながら休憩を取るミズキのどち狂つた発言に店長は無言でブラックコーヒーを入れ、くるみはそそくさと逃げ出した。

「だつて、毎日じゃないけど……帰つたらあつたかいご飯とお風呂が沸いてて、愚痴も嫌な顔をせずに聞いてくれて！ 晩酌に合うお洒落なおつまみにシメまで！ しかも、毎日夜がもう…………すゞくて」「ミズキ、千束とたきなの教育に悪い」

惚気出したら止まらないとばかりにミズキが夢中で語る間に千束は甘味がゼロのコーヒーをおかわりし、たきなはピーマンを丸齧りしている。

「浮気されたらしいのに」

「やめてあげましよう、千束。せつかく訪れた最期のチャンスなんですから」

「はーはっはっは！ 痛くも痒くもないわ、がきんちよども！ 彼女は私のこと好きすぎるから！ 裏切られるとかないし、大人の関係

を知らないから、がきんちよは全く

「結婚詐欺に会えばいいのに」

「やめましよう、千束。夢に浸るのも大人の特権ですから」

「アンタらにも幸せのお裾分けしてあげるわよ／＼あつ、でも私以上のパートナーは見つからないかもね／＼

「……………撃つか」

「もう、好きにしたらいいと思います」

ジャキンとリロードした千束をもう止める素振りもないたきなはキッチンに皿を下げにいけば、冷蔵庫から牛乳を取り出すくるみの姿を捉えた。

「くるみ、本当にミズキはハニトラに会つてないんですか？　あまりにもその、何というか…………」

「都合が良すぎる、だろ？　ボクもそこは不安に思つたから彼女の身辺を洗わせてもらつた。ボクの安全にも関わるからな」

牛乳をミカのブラックコーヒーに半分注ぎ、砂糖を多めに入れてかき混ぜる。まるで自分の頭を整理するかのようなその行為の後、彼女は一口味を確かめて、

「結果はグレー。渡米からマジシャンになるまでの記録はあつた。でも、生まれてから18歳になる迄の記録がどこにもない」

はつと、息を呑んだときの後ろでミズキのスマホが震えた。

調子に乗つた彼女が彼女からのラブコールだと高笑いしながら確認すれば、そのままカウンターに突つ伏した。

ミズキの手から溢れたスマホを千束が覗き込む。

書かれていたのは短い内容。

『旧友に会うことになつた。今日は迎えに行けない、ごめんね』

\*

「お待たせ、久しぶりね。ツバキ」

「今、僕も来たところさ。カエデ」

太陽の光が燐々と注がれるテラスにて、椿は白のテーブル越しに彼

女と久しぶりの対面を果たす。

かつての友であり、パートナーであり、背中を預けあつた幼馴染み。

「今は秘書として働いてるんだつけ？」

「ええ、司令のね。帰つて来てるならもう少し早く連絡しなさいよ」

「ちよつと野暮用があつてね。君を巻き込めなかつた」

——共に世界に笑顔あれ、と修羅の道に身を落とした暗殺者。

「貴方——リコリスをやめてから変わつたわね」

「——君は全く変わらないね。あの日、袂を違えたままだ」

在りし日の陽炎を追うように彼女達は再会を果たした。

## ボクの初恋を君に捧げる

「念願のお仕事につけて、人生楽しい？」

「楽しいよ。人を爆殺してた頃に比べたら万倍も」

「そう、よかつた」

懸念事項が消えたとばかりに、カエデ——楠木司令の右腕であり、元ファーストリコリス上がりの秘書は胸を撫で下ろし、料理を口に運ぶ。

一口運ぶだけで、自然と笑みが出る。果たしてそれは料理が美味しいからか、相棒が元気にしていたからか、恐らく後者だ。

「あらやだ、美味しいわね……」

「任務遂行にはまず下調べから。女の子を口説いてお持ち帰りするときと一緒だよ」

「そしたら、私もお持ち帰りされるかしら？」

「君を持ち帰るには、店のレベルが足りないよ。君クラスなら三つ星ディナーがふさわしい」

氣安いやり取りに、互いの声に歓びが混じる。道を違えたとはいえ、両者共に、互いの身を案じていたのだから。

このレストランにいる客たちは明日死ぬかもしれない、身の上で無事に再会できた事がどれだけ素晴らしいことか、彼女達以外に知る由もないだろう。

「その調子だと随分羽振りが良さそうね。海外で危ない目には遭つてない？」

「……海外は日本と違つて、堂々と銃を持ってるのがいいところだよね。あとは、これを持つていれば基本は安全だし、咎められてもマジック用と言い切れる」

軽く指を振れば、指又に現れるピンポン玉より一回り小さい玉。また手を振れば、その数は2から3へと増えていくが、その分、カエデの顔は静かに引き攣つっていく。

「ちよ、ちよつと！ ここで誘爆とかさせないでよ！」

「大丈夫大丈夫、これは火薬の量を抑えてあるから。瘤瘻玉くらいに

しかならないよ」

再び、手を開いて閉じれば玉は跡形もなく、なくなつていて。焦りを飲み干すように果実水を口に運び、カラカラになつた喉を潤していく。

それは余裕ありそうに見えて、彼女が抱えた心の影に踏み込むための緊張をほぐす為でもあつたが、

「それで？ 司令から何を言われて来たんだい？ 規則第一の君が業務時間でわざわざ来てくれるなんて、何があるつて言つてるようなものだよ？」

「わかっているなら、話が早いわ。率直に聞くけど、この間の地下鉄脱線事故……貴方が仕組んだ事じやないでしようね」

椿には最初からバレていたようで。逆に緊張が解けたカエデはスーツの内側ポケットから、グロツクを覗かせて、脅すように問いかける。

椿はそれを見て、皮肉混じりに笑えば、

「やっぱりあれはリコリスの戦いの後か。脱線事故にしてはニュース映像がいかにも爆発によるものすぎるよ。情報隠蔽なら、画像処理もした方がいい」

「情報局の仕事が増えるわね……じゃあ、貴方は爆弾を売りに日本に来たわけでもないわよね？」

「だとしたら、今頃ボクはリコリスに殺されてる。君も知つてると思うけど、ボクは近接格闘も射撃もサードの上、セカンドの下でしかない。工作兵と観測主のスキルを買われただけだ」

「わかってるわよ、でも疑う事は許してちようだい——貴方を信じてあげたいから、私達は疑うの」

「疑われば疑うほど、僕らマジシャンの掌だよ、カエデ。ある意味、僕らは騙してなんぼの商売だ。信頼で目を閉じないでおくれよ」

試すような物言いに、呆れてカエデは物も言えない。

それではまるで疑つて欲しいと言つてるような物ではないか。  
「相変わらず、捻くれた物言いをして。そんなんだから、姑息な罠に頼らざるを得ないのよ」

「映画の世界でしか見ない狙撃を成功させる人に言われても」

出されたコース料理を食べ終わり、柚子のジエラートを食べながら  
2人は牽制の言葉を投げ合つて。それでもそこに殺伐さは存在しない。

積み上げた信頼と、救えなかつた罪がある。降るはずの罰がない。  
「もう、帰るのかい？」

助けて欲しかつた親友に椿は寂しげに声をかけて

「ええ、これ以上は皆が過労死してしまうわ」

救えなかつた相棒に楓はさよならを告げて、

「またね」

互いに違えた道を再び、歩き出す。

いざれまた、交わる事を夢に見て。

\*

日本について、まずしたのは拠点の確保だつた。  
目についたテナントビルを丸々借り切つた。見た目は普通のグ

レーの建物。四階建ての周りにも溶け込んだ普通のビル。

通りに面したビル正面には看板もなく、さもテナントには何も入つ  
ていません。といった風に入り口もシャッターが閉まつている。  
パツと見空きビル。

しかし、中はお手製の罠だらけ。

一度入れれば何かを失わなければ帰れないと自負している。

自分の護身用の武器を作る、工房も兼ねてはいる為、爆発してもい  
いような、場所を選択したのだ。偶に入り込んできた獣達が良い実験  
台になるからと。

慣れてしまつた習慣だつた。金がないなら考えたが、溢れるようにな  
湧いてしまうのだ。ならば身の安全を第一に考えた方がいいと、過去  
の出来事から判断してしまつ。

車の出入りはビル裏側から、人目につきにくい場所を経由し、中へ  
の出入りもその地下駐車場を経由しなければいけない仕様だ。

それでも入つて来るならば、容赦はしないがなるべく帰つて欲しいとは本人も思つてゐる。

スマホを操作して、地下駐車場のシャッターを開ける。滑り込むようになつて地下駐車場に止めた、アストンマーテインをすり抜けて、レクサスを止めてアウディの鍵を引き出し、車に乗り込む。

地下全体の広さが視界に入るようになる。

『手料理作つて、待つててから。早く帰つて来てね♡』

「はー好き」

フロントミラーに映るだらしなく緩み切つた自分を切り替えるよう、引き締めた顔にするが、彼女がエプロン姿で料理をしているのを考えるだけで頬が緩んでいく。

「しつかりしろ～初恋の人に捨てられたくないだろ、椿」

自分に言い聞かせるように頷いて車を走らせる。

もし、あの日たまたま女の子がナンパに引っかかるず、即日出会いOKのマッチングアプリを使つていなかつたら、彼女と付き合えるなんてなかつただろう。

もしも、少しでもあの瞬間がずれていたら、きっと出会うことなく、目的を果たして日本を旅立つていただろう。

昔の懐メロではないけれど、ロマンスの神様がいたらならばこの出会いに感謝していくくらいには。

「——ずっと一緒にいたらしいのに」

一人車内で口籠る。

元気で聞くだけで高鳴るような声も、手触りの良い緩やかにウェーブしたその髪も、赤緑のハーフリムの眼鏡が引く理知的な目も、均齊の取れたしなやかな肉体も、全部全部——自分のものになればいいのに。

何でも買つてあげたい、何でもしてあげたい。

何処へだつて連れて行きたい、どこにだつて行きたい。

貴方がいれば、たとえ地獄の底にだつて戻つていい。

貴方の言葉がなければ、そこで朽ち果てていたのだから。

「ちようどいい時間かな」

車を走らせて、目的地に着く。

さつきまでの拠点とは違う、ミズキと付き合い始めてから速攻で契約したタワーマンション、その最上階にて彼女は待っている。

うつきうつきの感情を隠して、髪を整え、深呼吸。

彼女が好きな理想の男性像を演じるために。

「ただいま」

「あ、おかえりなさい。椿！ もう、連絡くらいしなさいよ！」

「ごめん、ごめん。旧交を深めてたら…………ね？」

出迎えた彼女を両手を広げて抱きしめて、今朝ぶりの彼女の匂いを堪能する。甘いのに何処か爽やかなレモンの匂いが、鼻をくすぐり、頸に顔を埋める椿に、ミズキはくすぐったそうに身を捩る。

「ほら。はやく入りなさい。ご馳走、出来てるわよ」

腕から抜け出した彼女の手に惹かれ、北欧イメージの家具を揃えた部屋に入り、ダークブラウンのテーブルに置かれた料理に椿は目を見開いて、首を傾げた。

「こんなご馳走……季節のイベントでもないし、何か狙いがあるのかな？」

「ぎくつ」

ミズキは、非常に浮かれていた。千束にダル絡みし過ぎて閉店後に、爪先を撃たれかけるくらいには。

『彼女に作つてもらつてばつかりの女はいつか振られるよ！』

ミズキ、衝撃が走る。

確かに家事に掃除、お弁当すらやつてもらつて自分が何かした覚えすらない3ヶ月。振り返れば自分が恋人だつたら容赦なく捨てるくらいにはヒモだつた。

これは不味いと瞬時に判断、即刻、椿のタワーマンションに向かつて買い込んだ材料でご馳走を作り出す。

3ヶ月記念という、面倒な女ランギングを更新しそうな心情で。「うーん、僕の誕生日もミズキの誕生日でもないからなあ」

怪訝そうな顔で部屋の食卓に並んだ、料理の数々を見て、ひとまず座る椿に、ミズキは冷や汗たらたらになりながら飲み物を注ぐ。

料理を作り上げて気づいたのだ、あれ？ 自分、大分面倒臭いことしてない？と。

「た、単なる息抜きよ。息抜き！ 旬の料理が安かつたからね！ た、他意はないわよ！」

どうもろこしの缶と、コンソメを冷たい牛乳で伸ばして冷製ポタージュに。メインディッシュは夏野菜をふんだんに使った夏野菜カレーだ。

最後に渾身の力作、タルトを生地に流し込んで、葡萄のコンポートで飾り付け。

旬ということで、予算も思つたほどかからずに豪勢な食卓が出来上がり、その完成度と建前の完璧さにミズキはほくそ笑んだのだが、椿は更に上をいくので。

「まさか、いくらミズキでも安易に3ヶ月記念だからなんて、理由を持ち出すわけはないだろうし……ちょっと幻滅しちゃうな」  
さあ、ミズキはもう後には退けない。

なんとかして、今日を3ヶ月記念以外の、何か別の記念日としてこじつけなければ。

「そ、そうよ！ き、今日はね……なんて事ない当たり前の日々を――」

「冗談だよ。でもその顔を見る限り、驚いてくれたようだね」  
「くっつ！ いい性格してるわ！ 貴方は！」

ミズキの顔色が変わったからか、あつさりと椿の方から種明かし。  
ミズキは嫌われるんじゃないかという恐怖に筋肉痛になりそうな心臓を抑え、深呼吸。その間に椿は料理に舌鼓を打っていた。  
「エンターテイナーになるにはまだまだだね。ミズキ」  
「……掌で踊るのは貴方の上だけでいいわ」

だけれど、ミズキの表情は歳上の包容力を隠さずに笑つていて。椿の心臓がまた別の意味で鼓動を速くする。明日には止まりそうなくらいに。

「無論、ベッドの上でもね」

けれど、やられっぱなしではいられない、彼女が外したボタンの下、うつすらシャツから透ける紐でしかないその下着に椿は飲み込んだ料理が気管に入つて噎せてしまう。

「今夜は——寝かさないでね？」ダーリン

椿は嗜虐的なミズキの誘いに、咳払い。

しかし、瞬時に椿は返す刃で、

「構わないよ——やだと、言つてもやめてあげないからね」

ミズキの箸を落とす事に成功したのだつた。

## 君と夏の終わり、将来の夢——結婚したいなあ

頭痛さえ覚えるほどの蝉時雨が、暑さをいつそう追い立てる。

部屋の窓を全て開け、余計な家電のコンセントを抜いて、気休めに風鈴を吊るしても、半刻もすればシャツの色は汗で変わってしまった。

「やつぱり、胸元透けるな。このTシャツ……ミズキ、チラ見してるのがバレてるからね」

「なんつーか、胸の谷間を見る男の気持ちがわかつたわ………すっかり恋人の裸……女性の裸を無意識のうちに目で追うくらいには性癖を開拓したミズキは椿の部屋で溶けていた。

エアコンが壊れたからと避難しに來たらしいのだが、生憎こちらも電線工事で今日中の復旧は不可能と聞いて、ミズキは落胆したまま、ヨギボーと戯れている。

「仕事場のJJKとかに手を出しちゃダメだよ？ 合意なしは獸の第一歩だからね」

「人を本能で動く動物みたいに言うなつづーの……ねえ、どつかいかなーい？」

冷蔵庫から水出しの麦茶を取り出し、冷やしておいたグラスになみなみと注ぐ。氷がカラんカラんと涼しげに鳴つて、すぐに露がグラスの表面に並ぶ。

「昼ご飯食べてシャワー浴びたらね。はい、麦茶」

立派な夏の風物詩を片手にミズキの猫撫で声に短く返して、彼女の待つベランダへ向かう。グランピングが可能！と謳っていた宣伝文句に違わず、広いベランダに冷水を張った金だらいに足をつける妙齢の美女が1人。

「……なんで、タワマンのベランダで、日本家屋の夏休みみたいな事してんのよ。もうちょい、なんかお洒落なのなかつたの？」

「グランピングでも良かつたけど、今日は夜に予定があるからだーめ。代わりに胡瓜の一本漬けはいかが？」

チエアに体を丸ごと投げ出して、顔をうつむけたままのミズキは不

機嫌そうな声をぶつけてくる。露出の激しい黒のタンクトップとブルーのホットパンツ姿は、汗で蒸れて、下手をすると下着姿よりも下着姿だ。

なのに、椿の目はいつもと変わらない。

男達みたいな獣を宿した情欲の炎がそこにはないのだ。

なんだか、それがミズキには悔しくて。

「はあ…………浅瀆け最高だわ。今日の天気予報、見た？ 猛暑日よ、

湿度80%よ。だくかくら」

「ビールはダメだよ？ これからデートなのにお酒は入れさせないから」

「けち。拗ねるわよ？ いい年こいた女が拗ねるのみたい？」

「録画して後々にキティ飲みながら楽しみたいくらいには」

「人の痴態でワインを飲むな！」

痴態を晒しているのは君だろ？ とばかりに汗で多少よれたハーフパンツの露出された部分に、キンキンに冷えたグラスを押し付けてみれば、

「……っひ、!?」

それまでの緩慢な調子からは大きく外れて、活ける魚みたいに、大きく跳ねた…………が、相変わらずチエアに投げ出された肢体は動かず、顔を挙げ、視線で椿に不満を訴えるのみ。

「……セクハラ」

「恋人の前で下着姿同然でくつろぐのはセクハラって言わないの？」

「私からするのはいいのよ。アンタからするのはセクハラを通り越して、事案」

「わあ、理不尽…………」

彼女の手の届くところにテーブルを寄せ、そこにグラスを置く。のどが渴けば、自分から手を伸ばして取るだろうと思つて。（いやでも基本、僕に取りに行かせるな…………）

「なんか、失礼な事考えなかつた？」

「いや？ ふふ、それより暑いのが嫌なら、なんで僕の家に来たんだい

? 涼しい場所に連れて行つてつて望めば君の自宅に迎えに行つて、海辺をドライブしたのに――

「……貴方がいるからよ」

ちりん、と吊るされた風鈴が風に揺られ、飛行機雲が飛んでいつて、残された白い跡が映えるだるいくらいの快晴の下、2人の合間を沈黙が支配して。

「……ごめん、今のなし」

「…………今更なかつたことには出来なくない?」

お互いの顔が熱いのは、きっと暑すぎる夏のせいだから。

そんな言い訳したところで、言の葉の思いは消えないけれど。

\*

「最近、めつきり暑くなつたね＼たきな＼かき氷食べてかない?」「何を言つてるんですか。店長とくるみにだけ任せていられないでしょう」

「ぶーぶー、少しくらいいいじやんか…………つてあれ?」

DAから振られた任務を片付けた帰り道、暑いのにたきなにベタベタしていれば、見つけたのは男女…………と見せかけた女性2人組。年休取つたミズキと、その恋人の椿だつた。たきなでさえ、千束のだる絡みから逃れようとするくらいには暑いのに、2人の手は離さないどばかりに握られていて。

「ほうほう、お熱いですね＼御二人さん」

「帰りますよ、千束。人の恋路に好奇心は禁物です」

「まあまあ、いいじやないですか、たきなさーん。2人がどんなデートするか、ちょっとだけでいいからさ!」

「…………いやと言つても無駄ですからね。1時間だけですよ」

千束のゴネにたきなは時間を確認、ランチタイムは過ぎてアイドルタイムだ。最悪はくるみだけでも回せるだろうと判断して、許可を出す。

千束はいえーい!と高らかに拳を突き上げて、彼女達の跡を追いか

け始める。

「ところで、たきなは尾行訓練の成績、どんなん?」

「上澄ではあつたと自負しますが。千束は?」

「ファーストリコリス舐めちやあいけねえぜ」

「何故、急に江戸っ子に」

暫く尾行していれば、たどり着いたのはブティック。一応、ブランドではあるが頑張れば学生でも出せないくらいの店に入店した。どうやら一人は、ここでウインドウショッピングをするようだ。

「ミズキはどうでもいいけど、恋人さんが何に興味あるのか気になるなあ」

「確かにミズキの話ぶりからだと、男装、もしくはユニセックスの服しか着ないらしいですからね、あの人」

ミズキに写真を見せてもらつた限り、見れば見るほど男性としか思えない顔立ちや振る舞いからして、女性らしい服を買いに来たわけではないと推測。

ミズキの合わせをしているのを見れば、本日の主役はミズキの方なのだろう。

「あの2人、めっちゃ注目されてない?」

「美女一人がされないわけがないでしょう……」

一見すると恋人同士が仲睦まじくデートしている光景なのだが、肝心の椿は、穏やかな笑みを浮かべている為に、侍らせてる感がない。どちらかというと、一步引いて、話を聞きながら、周囲に注意を払い、ミズキが人や物とぶつかりそうな時など、さり気なく気づかせている。

そのさり気ない注意がさり気なさすぎて、ミズキや店員との会話が、変なところで途切れないのである。

「やばい、椿さんってば、お気遣い紳士としてのレベル高すぎる……月9かよ」

「ミズキに彼氏を狙うつて、宣戦布告でもしてきたらどうですか?」

「直接戦闘なら千束が勝てるでしょう」

「それしたら、情報戦で負けるからな……」

三角関係とか発生しようものなら、包丁で刺されるのではなく、情報戦による社会的な死をさせられそうだと、おどけて言う千束に、たきなは苦笑しつつ、視線だけで彼女達を追いかける。

「まあ確かにミズキからしたら、高嶺の花以上ですかね……別れたりしたら、もう男じや満足できないんじやないですか？」

「どうか最近、ミズキの視線が私の胸や尻に行つてるし、既に性癖壊されてる自覚ないんじやない？」

更衣室やテーブルを拭いてる時にミズキの視線が、自分の尻に刺さつてゐるのを思い返す、千束。最近では無自覚とはいえ、美人なお客様を目で追つてる始末だ。

そんなミズキは椿にあれやこれやとキープしてゐる服を持たせては、店中を連れまわし、挙句の果てには1着しか買わないという男性が嫌うような時間の使い方をしている。

それなのに、椿は笑顔のまま支払いもしてあげて荷物も持つといふ彼氏を超えて従者の振る舞い。デートで100点を叩き出していた。

「それにしても、男装してるだけでちゃんと女性なんだね」

「どういう事ですか？」

「いやいや、男の人つて女の子の長い買い物嫌うじやん？ こういうのにちゃんと付き合つてくれる。それだけでポイント高いんだけどなあ……」

「いまいちピンと来ませんが……」

たきなが首を傾げると、千束はふむふむと思案した顔をしながら、手近にあつた小物を二つ手に取つた。

「ねえ、この一つだつたらどつちが私に似合うと思う？」

「え？ その質問つてなんか意味あります？ まあどうしても答えろつて言うなら、どつちも似合わないですよ。千束にだつたらこつちの色が似合うと思います」

「え？」

「……？ どうかしました？」

何やら眞面目な顔で、こちらが選んだ小物に視線を落とす千束。

その姿に、たきなは首を傾げた。

「よく分かりませんけど、結局なんだつたんですか、今の？」  
「ちょっと想定外のコトが起こつて混乱してる」

「？」

やつぱり千束の言葉が意味がわからぬいたきな。

普通のJKにしか分からぬ思考だろうか——みたいなことを思  
いながら、ミズキの方を見れば、そろそろ店を出ようかという空氣に  
なつてゐる。

「よつし、後を追いかけようぜ！」

「ノリノリですね、千束……」

ブティックを出て、ミズキを連れた椿はお洒落な繁華街へと足をす  
すめていく。ちょっと楽しくなつてきた2人は後を追いかけていく。  
すると、椿が車を取りに行つてくるとばかりに鍵を見せて、ミズキ  
をコンビニ前で待たせることに。

「変わり映えしないねー」

「そろそろ潮時ですし、帰りましようか」

「せめて、2人がこれから何処に行くか、見たい」

「野次馬根性丸出しですか……」

携帯をいじるふりして、ミズキから見えない建物の角でわちやわ  
ちやする2人。ミズキからすれば制服でバレる可能性があるので、こ  
れ以上は近づけない、さてどうするかと思案して

「君達、僕達に何か用かな？」

反射的に拳銃を引き抜きそうになつたきなを持ち前の観察眼で  
察知した千束が彼女の肩を押しやり、背中に回す。前に出た千束が見  
たのは目を見開いたままの椿だった。

「椿さん！」

「——なんで、僕の事を知つてるのかな？」

「あ、怪しいものではないです！ 私達は、ミズキの後輩で……！」

「……もしかして、リコリコ喫茶店のバイトの子達？ ミズキが

言つてる千束とたきなつて子」

こちらを值踏みするような目に、千束は愛想笑いでたきなは理路整然とした説明で取り繕うが、心臓はバツクバツクである。何せ、銃を見られたかもしない。ミズキの恋人の一般人に。

ここからどう巻き返そうか、脳を高速で回す2人の背後からこれまた信じられないとばかりに驚いた声がする。

「ちよ、アンタら！ 何でこんな場所に、いんのよ!?」

「げつ、ミズキ！」

「まさか、アンタら……尾行してたの!? 人の恋路を邪魔したら、馬に蹴られるって知らないわけ!?」

夜の繁華街で怒声と弁明が入り混じり、変に注目を集めてしまう。リコリスとしては失格もいい行為に、椿は目を伏せて、少し考えたまま、3人に声をかけた。

「良かつたら、食事でもどうかな？ 終わつたら送つていくよ」

——リコリスが自分を尾行してきた。その意味を正しく知る為に。

貴方のキスを数えましょう

「ふわあ…………ドラマとかでよく見るレストランでのディナーとか、これは一生ものの思い出ですな～」

「すみません、私達までご馳走になつてしまつて」

「別にいいけど、アンタらの支払いは私持ちなんだから、あんまり高いもの買うんじゃないわよ?」

案内された場所は、労働者たちが働く光を肴に贅を踏んだんに使つた料理とお酒を楽しめるイタリアンディナー。

急遽  
席を増やしてもらつたが、さすが本格のお得烹材なので満りなくJ.K.2人を案内し、ウエルカムドリンクまでサービスしてくれ  
るなどのいたせり尽せりに千束は感激、たきなは居心地が悪そうだ。  
「はは、構わないよ。これが今日のメニューかな。2人で1冊でいい  
かい？」

椿から差し出されたメニュー表を受け取り、開いたきなど千束。中身はイタリア語で書かれているが、2人からすれば問題はない。リコリスの教育である程度の外国語は抑えてあるのだから。

「マリ、又の、又の事だ。アリ、アの阿本二也かな異材二年

「イタリア版のイカ飯の事だよ。ヤリイカの胴体は色々な具材を詰めて、米の代わりにパン粉を詰めたものだね。でも、たきなさん、全部メニューに書いてあるよ？」

— . . . ^ ? ]

「何言ってんの、ほら、私達のメモリーには書いてあるわよ」

たぎなも千束もメニューに目を落とすか書かれていたのはイタリア語の料理名だけだ。しかし、ミズキのメニューには全て日本語で書かれていてる上に説明まで記載されていた。

それを見た瞬間、千束とたきなは自らの失態に気づく。

「最近の高校でイタリア語も教えてるのかい？」

「そ、そうですね、千束」

椿の言葉に、背中を伝う冷や汗を隠して千束は答えた。迷彩を装うJKの制服だが、どこの高校にイタリア語まで教える普通の高校があるのだろうか。

それが示すのは椿に疑われていること、少なくともただの女子高生なのかと思われているらしい。千束の顔から血の氣はひいたし、ミズキの指先は微かに震えている。

（ま、間違いなく疑われてるよね＼たきな＼！）

（すみません、千束。私のミスです。どうしますか、口止めですか？）

（ふざけんな、ガキども！　私の旦那候補を撃ち殺す氣か!!　やらせるわけないでしようが！）

（ここまで焦るつて事は、僕の尾行は予想外…………なのか？　DAに疑われるるのは仕方ないけど、これは頂けないな）

リコリコ喫茶の紳とも言うべき、アイコンタクトを交わす三者三様を大体の目星をつけた椿はウエルカムドリンクのシチリア産レモネードを飲みつつ、考えを纏めていた。

（彼女達が何者かは、ミズキを問い合わせたらわかるけど…………僕が元DAのセカンドリコリスだつて事は知られたくないしなあ…………）

力エデから聞いていた限り、DAのリコリスに対する態度に嫌気が差して、彼女はDAをやめて支部に移動したようだ。そんな彼女に、君の恋人は元リコリスだよ！と言つて嫌われたりしたら、

（あつ、やばい。想像しただけで泣けてきた…………マジでむり…………自殺しちゃう…………）

つまるところ、椿がやらなくてはいけないは彼女達リコリスがどの立場にいるのか。

逆に、ミズキ達リコリコ喫茶は彼女に正体を勘付かれずに無事食事会を終えられるか。

(((正体を、バラすわけにはいかない!)))

かくして、せつかくの食事会なのに、緊張のあまり、料理の味がしない人狼ゲームが幕を開けた。

「2人は喫茶店でバイトしてるみたいだけど、バイトは何で始めたの

？」

「ミズキは出会いの為だよね～私は人を探してて、それで接客業をしてます！」

「私は…………以前のバイト先で失態を犯し、クビにされたので、新しいバイト先で働いています。逆に椿さんは何でマジシャンで働いてるのか、聞いてもいいですか？」

まずは奉制のジャブが椿から飛ぶ。それを千束とたきなは華麗にかわす。美しく受け流した言葉のブロードを返すように、たきなのカウンター。

「マジシャンになつた理由か…………人を笑顔にしたかつたからかな。昔、とある人に励まされてね。『泣いてるより、笑顔でいなさい！　人生笑えば、幸せな未来は自分からやつて来るわ！』ってね」

「…………うん？　その言葉どつかで」

「にしても、君たちの制服。よく見かけるけど、2人はどこの高校なのかな？　たきなさん」

それを受け止めて、思いの丈をストレートに表現すれば、何故か巻き添えを受けたミズキが記憶を辿ろうとしている中で、椿のワンツーがたきなに飛ぶ。

「私達は…………彼岸花高校の学生です。こちらが学生証になります」  
狙い撃ちされた、たきなは滯りなくすらすらと答えながら、学生証を見せる。D Aから支給されている証明書だ。夜間に警察からの職質を免れる為に、存在しない学校と証明書を作り上げている。

たきなの1年生を表す、青い学生証を見た椿はふんふんと頷いて、チラッと鞄を見た。

「そういえばさつき、声をかけた時に鞄から何か取り出していたけど…………護身用の道具かな？」

「くつ！　それは、ですね…………」

「実は私達、演劇部でして、たきなは最近、凄腕のボディガード役を練習してるんですよ！　だから、ついうつかり反応しちゃつたんだよね～たきな～」

「言つてたわね、アンタら。近々、何かやるつて」

畠み掛けるような突きつけるボディブローに、たたらを踏んだたきなを千束がバトンタッチで救い出し、ミズキがごまかすように賛同。なかなか、尻尾を出さないリコリコ喫茶店に椿は笑っているが、目が笑っていない。

「因みになんだけど、何で、椿さんは私達が後を追いかけてるって気づいたんですか？」私達、結構上手く尾行してたつもりでしたけど」「海外で、女一人だと危ないからね。ストーキングとかには気をつけるようにしてるんだ。過去にそれで痛い目を見た事があるからね」それに気づいた千束が危険止むなしのインファイトを仕掛けた。たきなもミズキもやめろという制止を目で訴えたが、先に勝負に椿が乗つた為に、止める機会を見失う。

「どんな気をつけ方を？」

「例えば……カーブミラー やショーウィンドウ、それらに映る虚像を逐一目で追うようにすれば、自分の背後も確認出来るんだ。千束さんもやって見るといい」

「へえ、まるで映画に出てくるスペイミたいまさか、実は007だつたり？」

「まさか。強いて言えば『グランドイリュージョン』に出てくるホースメンだよ。千束さん、結構映画詳しいね。おすすめとかあれば教えてほしいな」

「おつ、椿さんも映画行けるクチですか？　いいですね、例えば……『SAW』とか？　1作目だけはミステリホラーでおすすめてすよ！」

綱渡りみたいな言葉の争いに、たきなもミズキもたまつたものではない。ヒヤヒヤしつぱなしで美味しい筈の料理がまるで濡れ雑巾を口に運んでいるようだ。

「SAWシリーズは見たことあるよ。マジックの参考にね。人を騙すテクってのは視線誘導以外にもあるってのが演出面で勉強になる」（まあ。本当は罠とかの勉強メインだつたけど）

せつせと再現した罠は楠木司令や顧問のミカから『あまりに人道に配慮がない』と言われて、廃止させられた事は記憶に新しい。カエデ

にすら泣きつかれたので、ひたすらヨシヨシと甘えさせられたくらいだ。

「そ、そういうえば、椿さんは学生時代はどんな生活してたんですか？ わ、私達も進路に迷つていて」

「…………そう、だなあ」

千束の試す物言いに心臓が飛び出そうなたきなの言葉に、椿は僅かに瞑目、ゆっくりと言葉を選ぶように紡いで、

「学生時代に少し、事件に巻き込まれてね。迂闊だった僕もいけないが……表沙汰にできなくて、暫く塞ぎ込んでいたんだ。それ以降かな。僕がこんな感じになつたのは」

「え、アンタ。昔からそんな感じじゃなかつたの？」

椿の言葉にミズキが疑問をぶつけるが、彼女は誤魔化すように笑つて。

「正確には、昔から女の子が恋愛対象だつたけど、それが強くなつた感じかな。後は自分の弱さが気に入らなくなつて、王子様っぽい振る舞いをする様になつたんだ」

「へえ……因みにいつ頃から？」

「渡米してからは、今の性格のままだよ。理想を貫けば現実になる。もう、昔の僕がどうやつて振る舞つていたかなんて忘れちゃつたよ」食後のコーヒーを飲み終わつた彼女は告げるよう語る。

自分のようにはなつていけないと、嗜めるように。

「進路は君たちが決めていいんだ。誰かに邪魔される必要はない。何をしたいか、を挙げてからどこまでなら妥協出来るかを考えるといい。僕から言えるのはそれくらいかな」

\*

「いい子達だつたね」

「まあ、いい子達ではあるのよ。馬鹿だけど」

ディナーを食べ終えた2人を、駅前で送つた足で、椿がミズキを連れてきたのは屋上に備え付けられた夜間プール……つまり、ナイト

プールである。

ボトルカラーの白と赤でデザインしたサンベッドやパラソル、浮き輪などが空間を彩り、正面に見える延空木が点灯するころにはライトアップが加わり、華やかな暑い夏の夜が過ぎ去る。そうとの噂だ。

現在では、南仏をイメージしたガーデンプールでフォトゾエニックでラグジュアリーなひとときを満喫できるらしいので、ミズキはうつきうつきで買っていた水着に袖を通して。

この日のために仕上げたと言つてもいい、お腹周りを曝け出して。でも足回りやお尻が不安なために、翠と水色のパレオにしたミズキはプール入り口で恋人を待つ。

ミズキは美人だ。翠のビキニに隠されたしなやかな肢体と、健康的な色気は正直なところ、一夏のアバンチュールを望む男たちから狙われてもおかしくないが、

「ミズキ、ほら、もつとギュッてくついて。じゃないとボートに乗れないだろ？」

「い、いやいや…………だつて、背中に、その…………当たつてるし…………」「ふふ、ミズキが大好きなFカップのふわふわなおっぱい当てられて嬉しくないの？ 素直じゃない子には悪戯かな」

そこらの男が路傍の石になるような、竿のないイケメン、おっぱいがある男、めちゃくちや男前な美女が、ミズキですらガン見するくらいの谷間を晒した水着をつけているのだから。

そんな美女同士の戯れに混ざろうとする男はない。だつて、下半身に血液集まりすぎて、声かけた時に幻滅されそうだし、美女2人とも一般男性くらいなら返り討ちにできる実力者なので。

なので、ボートの上で座りながら、ミズキの背後から抱きついてる椿はマークリングとばかりにミズキのうなじにキスを降らせる。くすぐったさと恥ずかしさに身をよじるが、椿の白魚のような指先がミズキのお腹を撫でて、ミズキが吐息を漏らす。

「今日は2人に邪魔されたから…………この後は思う存分、愛を交わそ

うね」

「あ、明日は…………私、仕事なんだけど…………」

「大丈夫。跡は見えないところにだけきつちり残しておくから」「つけないでって言つてんだけど!? 更衣室で千束やたきなに、うわあ……つて目で見られる私の気持ちを考えて!?

「…………いや?」

頸に顔を埋めながら、甘えたように声を出す自分の恋人に對して、甘やかしたくなるのがミズキであつた。惚れた弱みもあるのだが、普段甘やかされてばかりなので許したくなってしまうのがいけないところ。

「ねえ、椿? 椿は何で、私を選んだのよ。女好きで割と遊んでいたのは知ってるけど……私以外に浮気とかしてないでしょ、アンタ」

「うん? どうして浮気してないって分かるの?」

「実はアンタの携帯に追跡アプリ仕込んでんの。気づいてた?」

「それは…………知らなかつたなあ」

これには本当に気づいていなかつた椿から感嘆の声が漏れた。かつて、彼女はD A情報担当でもあつた、それで培つた技術だろうが、「何でバラしたんだい? バレたら、幾らでも対策は打てるのに」「バラした代わりに教えてほしいのよ。今日、アンタが話してくれた過去…………私、気づいたの。アンタ、自分の事を何も話してないって」触れ合う素肌の心地よさを逃さないように、椿が自分を離さないよう、逃げないように、ミズキが椿の腕を自分の前に回して、抱き締める。

「多分、話したくないは分かつて。私もアンタに話してない事いっぱいあるし……だからせめて、私を選んだ理由だけ聞きたい。それさえ分かれば、私は……アンタの恋人として自信を持てる気がする」

ミズキの絞り出すような声に、水面が跳ねて、飛沫が上がる。水面に映つた彼女は思い惱んでいて。

わざわざ約束なしに今日、会いに来たのもそういう話がしたかったからなのかと察して。

「自信なんて…………いや、そうだね。付き合つてから、僕は君に何も話してなかつたもんね。疑いたくなる気持ちもわかる。分かつた。君

を……ミズキを選んだ理由はね」

椿もまた、彼女に応えるように勇気を出す。彼女にバレたら幻滅されるかもしれない。それでも彼女が望むならと、彼女の肩に顎を乗せて、

「僕は……今から7年前にミズキと会つてるんだ。その時に君に言われた言葉に僕は救われた。それだけだよ」

「その言葉って……やっぱり、さつき言つてた、アレ？ 道理で聞き覚えがあるわけね。私が言つたのよね？ 7年前……か」

ミズキは記憶を巡らせるが、その頃はまだD.Aに籍を残しつつ、喫茶店業務に励んでいた筈。椿はリコリスではないと仮定しても出でこないことに歯噛みする。

「ごめん……覚えてないわ」

「いいんだよ。世の中はそんなもんさ。言つた相手が覚えてなくても、何気ない言葉に傷ついた、救われた人はいっぱいいる。ミズキを選んだ僕もそれつてだけさ」

ミズキの申し訳ない顔に椿は頬に唇を寄せて、リップ音を鳴らす。気づかないのも無理はない。椿はリコリス時代と、性格も容姿も変わっているのだから。

だから、ミズキが出来ることはただ一つ。

「だつたら——私に今の貴方を刻ませて。椿。貴方がいないとダメな私に、何を考えても貴方を思うような……私に作り替えて」

椿の後頭部を手で迎えに行つて、ミズキが振り向き、寄せた唇が互いに数センチのところで椿にミズキはお願いする。

「私を——貴方のものにして」

甘く、溶けるようなその誘いを渡すようにミズキは唇が剥がれそつなほどにキスをした。溢れた唾液が胸元を伝つてもやめないくらいに情熱的なそれは、揺れたボートから落ちるまで続いて。

水中から光が舞う水面に上がる中で抱き合つたまま、2人は自らの体温を伝えるように、腕を背中に回したまま。互いの顔を見つめていた。

「今日は私がリードする。貴方に私を刻み込むから」

こちらを見る彼女の瞳は吸い込まれそうな青色で、先程まで快樂を漏らしていた形のいい桜色の唇に目を奪われて。

「——愛してるわ、椿」

彼女の夜空色の藍瞳が目蓋に遮られ、連れられて自分も目を閉じた。

小さな暗闇の中、体の内側から漏れ出る情念を必死に押さえつけた中、感じたのは唇から伝わる熱で。思わず漏れたこの言葉と、

「——好きだよ、ミズキ」

この熱が君に伝わればいいと思った。

## 君がいた夏は遠い夢の中

空に消えていく打ち上げ花火のように、この関係にもいつか終わりが来るのだろうか。

「ミズキ、起きてるよね……流石に」

昼過ぎの痛いくらいの陽射しの中、椿は揺らぐ陽炎を車で駆け抜け。恋人のミズキからのラブコールに合わせて、彼女のマンションにお邪魔する為にだ。

そろそろ同棲を考えてもいいかもしないとは椿は考へているのだが、実行に移せない理由があつて。

「ミズキ～まーた、散らかして。偶には自分で片付けたらどう？」  
床には散らばった服と下着、机の上には所狭しと耐ハイヤビールの空き缶と瓶、焼き鳥の串などが乗つたまま、ミズキはソファの上で仰向けでスマホを操作している。

つまるところ、ミズキの堕落っぷりである。

「今日は片付けた方よ～それよりもさ～浴衣、どれがいい？」

空返事に椿は肩をすくめて、彼女の着替えと下着をかごにしまつていく。付き合いだしてから、せつせとお世話をばかりからか。ミズキの怠惰つぶりが増している気がする。

（実に、いいことだね……このまま僕なしで生きていい体にしていきたい。偶にはミズキの手料理食べたいけど）

「ちよつと、聞いてるの？」 椿

「ミズキは若草色が映えるから、若草色を下地に好きな花柄でいいと思うよ。ミズキスタイルいいし、なんでも似合うとは思うけど」「浴衣ねえ……胸潰すから嫌なのよね。苦しいし」

豊かな双丘は寝ていてもその存在が崩れることはなく、夜に熱をかわす時にはその胸の柔らかさに椿でさえも理性を保つことがやつとなくらしいなのだから。

「持つものの傲慢だよ、それは……ミズキ、服は脱ぎっぱなしにしないで、ちゃんと置むか掛けないと。しわになっちゃうよ。せつかく買ってあげたのに……」

「んーっ！ 椿、うるさ〜い」

「わあ、理不尽……ミズキ？ 僕は君の恋人であつてママじゃないんだよ」

望むなら、赤ちゃんプレイさえやる覚悟の椿ではあるが、ミズキのママになるつもりはない。ミズキの恋人としてダメにしたいだけで、ミズキの都合の良い存在になりたいわけではないので。

「でも、キッチン周りは綺麗にした！ だから、ごほーび、ちようだい？」

寝つ転がつたまま、ミズキは艶やかな唇を指差して、椿からのキスをねだる。付き合い出した頃は時折椿からのキスに躊躇うことがあつたけれど、今では自分からねだるくらいには性長してしまつた。キッチンを見れば、確かに生ゴミやシンク周りに水垢はない。そう考えると、ご褒美をあげるのはやぶさかではないので、ソファの肘置きに頭を乗せた彼女を覗き込んで、唇をつける。

「んつ……もつと」

ねだる彼女と吐息が混じり、生物のような粘膜の接触に欲望がふつふつと湧いてくるのを感じる。これ以上は我慢できなくなると、わざとリップ音を立てて、終わりにした。

「はい、おしまい。浴衣、買いに行くよ」

ミズキも唇を尖らせていたが、渋々立ち上がると手荷物を持つて玄関に向かう。椿も溜まっていたゴミを持って、階段を降りる。

夏の匂いが濃くなる頃、開かれるのは花火大会。夜空を彩る花火に負けないくらい、恋人を飾る。

いつ振り返つても色褪せないセピア色の記憶を作る為に。

\*

「ようこそ。いらっしゃいました。椿様。本日はどちらを御所望でしょーか」

「彼女に似合う浴衣を。勿論購入——」

「いえ、レンタルで！ レンタルでお願いします！」

ミズキは真夏なのに冷や汗が止まらない。案内された呉服店が一見さんお断りのお店で、なおかつ値段が想定よりもゼロが一つ多い上に、所作や立ち振る舞いから歴史を感じる。

「ここからアレまでを前株で○○で領収書で」

「これを彼女へのプレゼントに、現金で」

周りを見れば、若い女性を連れたブランドスーツの男性が、領収書で和服を購入していたり、恰幅のいい男性が小洒落た女性に購入していたりと、何処となく漂う高級店に胃が痛くなつてき了ミズキ。

「それでは椿様、奥の部屋に。奥様はこちらへどうぞ」

「お、奥様…………つてそんな、やだあ、もう！」

「ミズキ、ミズキ。戻ってきて」

さらつと貢ごうとしてくるスパダリ彼氏の足を踏みつけ、レンタルを強く訴えれば、くすくすと笑った店員に連れられて、奥の部屋に。畳の匂いと芳醇なお香の香りが入り混じる部屋にて、奥様という言葉を反芻しながら、待つていれば、1着の浴衣が運ばれてきて。

「ミズキ様。こちらはいかがでしょうか。若草色の下地を基調として、赤と白色の……椿の花を模様としております。椿は『長寿』などを意味しており、格式ある浴衣になります。椿様の隣に立つには相応しいかと」

「あ、じゃあ、それで……」

「ありがとうございます。一度着付けした後、レンタル予約をしておきますので、お時間になつたらいらして下さい」

店員に誘われるまま、一度着てみると。

何しろ、浴衣なんてミズキからしたら初である。

正確に言えば、恋人と浴衣を着て夏祭りデートなんて、過去の自分からすれば信じられないくらいだ。

「奥様はスタイルがいいので、タオルを詰めないといけませんが……色合いは申し分ないです」

姿見に映った自分は、いつもの喫茶店の和服とは違う品の良さがあつて。浴衣に着られている感はあるけれど、それさえも手直しによつて自分の色に馴染んでいく。

その後も、帯の色や髪を纏める簪などの合わせや由来の説明を受けながら、差し出された抹茶とお茶菓子に舌鼓を打つていれば、別室にいた椿が合流。

「ミズキ早かつたね。気に入った浴衣は見つかつた?」

「ええ。アンタの方こそ、長かつたわね」

「色々、いい浴衣があつたからね。目移りしてたんだ。どんな柄かは楽しみにしておいてね?」

人差し指を唇の前に持つていく姿があまりにもサマになつていて、ミズキは赤べこのように真っ赤な顔で頷くばかり。その初々しさに店員も微笑みながら、2人に頭を下げて見送るのだった。

\*

「それでは始めていきますね」

「え、あ、はい??」

美容院でセットしてもらおう、と椿に連れてこられたまではいい。その美容院、サロンだけで5階までフロアを占めているのもまだ分かるし、恒例のように顔パスなのも驚くが納得はする。

ちょっと、隣で受けているのが最近映画で話題の有名女優やすれ違う人がゼクシイで見たモデルばかりでミズキは言葉を失う。

最初に5階に連れて行かれて、椿と共にスパトリートメントを受ける為に、石鹼だけで数千円なものを選択し、施術室に。

海賊達が舞い踊るような大海原の船上で、気づけばマッサージを終えていたミズキは椿に連れられて、階を降りる。

「髪はいかがいたしましたよ。浴衣を着るとお聞きしていますので、夏風に涼しげに。簪をお使いになるならば、長い髪を纏めてアップにするようでよろしいですか?」

「あ、はあ、お任せします……」

「椿様は、髪を編んでカチューシャ風にいたしましたよ。椿油を軽く塗つて艶を出します」

「隣の彼女のエスコートなんだ。気合いを入れて頼むよ」

「かしこまりました。心を込めてやらせていただきます」

4階では、漸くとばかりの髪のセットに入る。

怒濤の店員から来るマシンガントークに、ミズキは美容院に初めてきたぼつちみたいな受け答えをしてしまう。

対して、椿は堂々とした態度で受け答え。本来の彼女はショービジネスを舞台にしているのだから、当然だといえば当然なのだが。

「次は3階で、スキンケアとヘアケアをさせていただきます。2階でメイクアップをしていただいて、終わりとなります」

「因みに……お値段はいくらでしようか？」

「22万になりますが、椿様からいただいておりますので大丈夫ですよ？」

「ひえつ……」

普通に考えて、絶対に一人では訪れないであろうサロンのお値段に戦線肅々しながら、流れるように飾り立てられていく自分の姿に嬉しさ半分、22万の数字に思考が邪魔されて、背筋が冷える。

「大丈夫だよ、ミズキ。僕はミズキが綺麗になる姿が見たいんだ」

「椿……」

「因みに結婚してくれなかつたら、全額返済ね？」

「椿?!」

「こ」まで貢がれて平気な人達は一体、何を考えて生きているのかとミズキは常常思いつつある。スマダリ彼女とはいえ、本気で将来的に身請けするレベルでなければ吊り上げが取れず、胃が痛くなる勢いだ。

「冗談だよ、ミズキ。まだ……ね」

「まだつて……そんな、期待しちゃうじゃない」

ヒモやニートには才能がいるとはいるが、自分にはつくづく才能がないと実感する。代わりにあるのは花嫁になる才能しかないとミズキは深く頷いた。

千束が聞いていれば、養豚場の豚を見るような可哀想な目をするだろう。何、夢見てんだ、この女は、と。

「お熱い空気感の中、申し訳ありませんがヘアメイクさせていただきます」

ますね。いやつくのはお祭りまで取つておくべきかと

「「ごめんなさい、お願ひします」」

それより先に店員が限界だつた。

プレイボーイをプレイボーイに売るくらいには。

\*

美人が一人、賑わう祭り、行き交う群衆で君を待つ。

待ち合わせをしたいと、切り出したのは自分だつけて思ひ返すように携帯を開いて、過ぎる時間を惜しんで思ひを馳せる。

(どんな浴衣を着てくるのかしら……暗い色が似合いそうよね。美人でスタイルいいから、なんでも似合いそうだけど)

「ミズキ」

浴衣を見て、なんて声をかけようかなんて。  
選んでいた言葉全て夜の帳に隠された。

「——お待たせ。寂しくなかつた?」

彼女が着ていたのは……黒地に帯は赤、柄は花火と儂げな印象を与える浴衣姿はとても綺麗で儂くて。

初めて出会つた第一印象を思い返すような透き通るガラスのような美人がそこにいた。

「あ、その…………に、似合つてるわね。浴衣」

「ミズキこそ。僕が見立てた通り、若草色が似合つてる。可愛いよ、惚れ直した」

「あつ…………うつ」

先手を取ろうと告げた言葉をナチュラルに返されて、言葉の弾が虚空に消える。じわじわと上がつていく心臓が、暖かで心地よい熱を顔に運んでいく。

熱帯夜だと言うけれど、この暑さは夏の暑さじゃ足りなくて。

「ミズキ、あまりにも綺麗だから……エスコートさせて貰えないかな?」

差し出された手が心地よい冷たさを帶びている。手が冷たい人は

心が温かいなんて言うけれど、今はそれより着飾つた彼女の美しさと  
凛とした佇まいに目を奪われて、

「さ、させてあげるわ……だから、離さないでよね」

握り返した手からしつとりした柔らかさを感じて、指先が絡んで恋  
人の繋ぎ方に変化する。今更ながらに学生時代の思い出のような恋  
愛に、ミズキは柄にもなく、10代に回帰して、先導する彼女を追いかける。

「——離さないよ、もう二度と」

学生時代を捨て去った2人の、初めての夏が今、始まる。

## 空に消えていった、打ち上げ花火

「リンゴ飴つて凄く食べづらいわよね…………」

「でもお祭りだと買っちゃうよね」

浴衣美女が2人、行き交う人に紛れて、屋台を巡る。

群衆に流されないように繋いだ手は離さずに。

「日本のお祭りといえば綿飴、盆踊りだと思うんだけど、ミズキは?」「そりや、金魚すくいに射的でしょ。あとは、理不尽なくじ引きとかね。あれでゲーム機当てるのに夢見た時あつたわ〜祭り行けなかつたけど」

「僕もだよ。大人になつてから夏祭りとかを初めて体験したかな。10代の頃は寮生活だつたからね」

甘酸っぱい青い春を思い返すはずが、2人によぎるのは銃弾と血が飛び交う赤い夏。夏になると羽目を外して、馬鹿をやる犯罪者が増えるので、彼女達は寝る暇もなく、治安維持に勤しむのだ。

「ミズキ、僕はしまき食べたい」

「いいわね。あ、かき氷もあるじゃない。たまには奢つてあげるわ。何味がいい?」

「宇治金時!!」

「リコリコ喫茶店に来て頼めば?」「奢るとは?」

だから、むしろ夏祭りを嫌う方が普通であり、大人になつて冷静になつたからこそ夏祭りを心から楽しめるとばかりに心ゆくまで屋台のご飯に舌鼓を打つ。

「ほら見なさい、椿。学生達が、何を食べるかで悩んでるわ。可愛いわね〜」

「大人の財力でビール飲みながら、肉串大量に持つてる人が言うとノタルジー消えるよね」  
「両手に持つてるフルーツポンチとクレープ下ろしてから言え」

まあ、彼女達はいい大人なのでビニールのぷよぷよカップでビールを飲みながらの食べ歩きという、青春を取り戻すとは真逆の楽しみ方

をしているのだが。

「ミズキ、たこ焼き食べる？」

「食べる！ 酒のつまみには欠かせないわよね～ソース味つて……」

たこ焼きを受け取ろうと片手を開けたミズキの口元に差し出されたのは、青海苔とソースが香るたこ焼きと椿の悪戯っぽい笑み。

その意味を理解したミズキの顔に徐々に赤みが差していき、それでも付き合いに慣れた彼女は上目遣いで前髪をかき上げて、

「はい、あーん」

「あ、あーん」

たこ焼きを口に運び、唇についたソースを指で拭つて、舌で舐めとする。一連の流れを見ていた学生のカップルの片割れは生睡を飲み込み、連れに熱々のたこ焼きを押し付けられたくらいには視線を浴びる。

「ざまあ」

「それさえなければ大和撫子なのになあ…………嫁の貰い手なくなるよ？」

「うつさいわ。それにアンタがもらつてくれるでしようが…………あ」

思わず漏れた心の声に、繋がる手からじわりと滲み出す焦りがあつて。心なしか歩く速さを上げたミズキだったが、とってもにこやかな椿からは逃げられない。

「ミズキ」

「ミズキシラナイ。ワタシハセーラームーン。ツキニカワツテオシオキヨ」

颯爽と戯れに買ったお面を被り、偽物を演じるキャラの選択が古臭いミズキに椿は彼女の腰に手を抱き寄せて、耳元で甘く、未来を告げるよう囁く。

「ミズキはさ、どこで式を上げたい？ ハワイ島の海が見える小高い丘？ それともカナダの静かな湖畔がいい？ ミズキが好きなところを選んでいいんだよ？ 式を挙げるなら関係者達呼ばないとね」

瞬間、ミズキの脳裏に過ぎる関係者達の写真…………具体的に言えば

千束が見せて来たハリウッド映画やロマンス映画の主演達と肩を組んだり、ツーショットを取る椿の姿。

そこにちよつとへりの操作ができる一般人喪女が紛れたらどうなる？

結論は省くが、間違いなく死ぬ。

「射的……」

「え？」

「射的で決めるわよ！ 私が、勝つたら先ずは同棲から！」

自分の顔がいいことをわかっている使い方の椿に、ミズキの体から力が抜けていく…………が、辛うじて踏みとどまつて、射的を指差して吃りながらも会話の矛先をすらすが、

（焦つて可愛いなあ、ミズキ。どつちにしろ、段階を踏んでいけば合理的に連れ帰る事出来るし…………ミカ元司令に交渉してみようかな）椿からすれば、焦るミズキも可愛いのでヨシ。第一に射的勝負を仕掛けてはきたが、ミズキはリコリス脱落生、椿は元セカンドリコリスの上に射撃は今でもたまにやっている。

「いいよ。アメリカでも射撃はやつてるからね。僕の勝ちは揺るがないけど、それでもやる？」

「ふふ、貴方は勘違いしているわ。椿。勝負ってのは——終わるまで分からぬものよ！」

意気揚々と射的を始め出す美女2人だが、椿の構え方があまりにもサマになり過ぎてるので、次第に人が集まりだす。顔立ちが整っているだけで、全てが絵になるのだから、仕方ないのだが。

「…………あれ？」

「よつしやあ！ 1個目！」

椿がかっこよく品物を落とす事はなかつた。

椿は基本的に、『誰もが理想とする男性』を演じる傾向がある。この場合、連れてきた彼女をがつかりさせない為に高得点の品を迅速に擊ち落とすのが、いいのだが。

（調子に乗つて、見ないふりしてたけど…………僕、あまり射撃が上手くなかったな…………そういえば）

自分が何故ギリギリセカンドにいれたか原点を思い出し、右手を額に添えて、神妙な趣に。その上、射的の屋台では高い品物には基本的に錘が入れられており、ちよつとできる程度では落とせないようになっている。

たきなクラスの射撃の腕前があるならともかく、パートナーにさえ、『乱戦中には銃は使わないで』と言われるレベルの自分にはあまりにも無理があつたようだ。

「よつしや、2個目！ 椿！ アンタは!?」

コルクを使い切つて、狙っていたお菓子の詰め合わせを落としたミズキが振り向いた先には空になつたコルク皿に向けて手を合わせて必死に拝む椿。

「お願い！ コルク増えて！」

「増えねーよ？ 悔しいなら金魚すくいやる？」

ミズキの研ぎ澄まされた言刃に、椿は無表情のまま屋台の人へ銃を返すのでミズキは居た堪れない空気を変えるために、近くの金魚すくいを指差した。

「ふふ、さつきまでの僕とは違うよ、ミズキ。今度こそかつこいい僕を見せてあげるから、応援してね。では……いざ！」

「期待してないけど頑張つてね」

そして、期待を裏切らない椿はいい所を見せたいがあまり、力みすぎて豪快に金魚ごと水をぶちまけて頭から水を被るという非常事態が発生。

「これを使うか……」

「はいはい、おしまい。おじさん。金魚返すわね。行くわよ、椿」

「金魚取れなかつた……」

終いにはミズキの前に使うつもりもなかつた爆弾型スープーボールを取り出す始末。水ごと金魚を打ち上げた為に、おまけの金魚でもらえず、しょんぼりと肩を落とす彼女をミズキは慰めたまま、そろそろ時間かと手を引く。

「ミズキ どこへ行くんだい？」

「そろそろ花火が上がる時間だから、花火を見るに決まつてんでしょ

うが。早く行かないと場所取られるでしょう?」

何しろ、ネットでも話題の花火大会だ。

学生達や仕事帰りの社会人達で、つた返す中で早めに席を取りに行かなければ、花火を立つて見ることになってしまふ。

それはそれでいい思い出ではあるのだが、2人とも20代後半。

膝や腰への負担をなるべく避けていきたいのだ。

そんな考えの下、群衆をすり抜けながら進むミズキを椿が止めた。

振り向けば、さつきまでの萎びた椿はおらず、いつも彼女が、優しく手を引いて。

「こっちに穴場があるんだ。ベンチもあつてね」

椿に言われた穴場の場所に誘われたミズキは、小さな高台から祭りの会場を見下ろせる場所で、椿が隣に並ぶ。

差し出されたのはコンビニで買つて来たのだろうアイスコーヒーがあつて。

「…………」

花火が上がるまで少し時間がある。話を切り出すには最適な時間だろう。椿は深く呼吸を一つして、ミズキを真っ直ぐ見つめる。

(この空気感…………ドラマでしか見たことないけど見たことがある!

告白の空気! 私、されたことないけど! というか私達恋人同士だけど! つてことはつまり結婚! プロポーズ!?)

「——ミズキ、話があるんだ」

ミズキは黙つて頷いた……が、彼女の呼吸が荒い。獰猛な野生動物が今すぐに目の前の獲物に食らいつかんばかりの形相。

まさに今すぐに結婚したいミズキからしたら、まさしくそれはぶら下げられた高級肉。食いつかないわけにはいかない!

「ミズキ、僕は来年の年明けにはここを出る

「…………え?」

「1年限りの休業なんだ。これはニュースでも取り上げられていてね。やるべきことはまだ果たせてないけれど、復帰を待っている子猫達を待たせるわけにも行かないんだ」

青天の霹靂、というかすっかりくるみが言つていた話が記憶からすっぽり抜けていた。確かに大事な話でだけれど、大好きな人と大切な思い出を作りに来て、それはあんまりではないか。

ミズキは震える体を抑え込んで、彼女に手を伸ばして。

「その時に……君にもついてきてほしい」

震えが止まつた。手が引っ込み、腕が出る。

衝動が、葛藤が、全てがない混ぜになつた感情のまま、ミズキは椿に抱きついた。

「あつたりまえじゃないの!? 馬鹿じやないの!? 私が断ると思つてたの!」

「だつて、君。リコリコ喫茶店、結構好きだろ?」

「……ええ、そうね。好きよ。生意気な妹みたいな奴がいて。コーヒーが美味しい店長がいて。最近また生意気な妹が2人増えたけど。それでも私の家みたいな場所だもの」

中原ミズキは孤児である。DAに拾われたがリコリスになれず、情報局で働き続け、これから先の未来を犠牲にして、平和を維持する子達を見て、ミズキは嫌気が差して、ここに来た。

リコリコ喫茶店は——彼女にとつての家族である。

そう近くない内に終わるとしても、だからこそ、

「彼女達が歓迎してくれないわけがないもの。馬鹿だけど、気がいい奴らだから」

「…………うん、分かつてるよ。ミズキ」

分かつている。彼女がいる今の場所がどれだけ居心地いい場所なのかも。その中心……自分の恩人でもある錦木千束がもうすぐ死ぬことも知つている。

「だから改めて、キミに言わせてほしい」

彼女の瞳が自分を写し、自分の瞳に彼女が映る。2人だけの世界で、互いの顔がよく見えるように夜空に花火が咲いて――

「僕に君を幸せにする権利をください。君に救われた僕がこれから

先、全てをかけて貴方に返すと約束します」

『また、貴方に会つたら好きだと言つていいですか!!』

「…………ん?」

告げられた彼女の言葉に妙な引っ掛けたりを覚えた。花火照らされた彼女の顔に、何故か過去のセカンドリコリスの残影が達成感と焦燥感が入り混じる乙女な顔をしていて。

彼女の服の裾を握る手に力が入る。

その先を語ることは容易いけれど、きっと言つてしまえばこの関係が壊れてしまいそうで。

「どうかしたかな? ミズキ?」

「…………ううん。何でもない」

ミズキは口を閉ざすように、椿に唇を寄せた。

彼女の過去と未来が繋がつてしまつた、裏取りをしてからでも事實を告げるにはおそくはない。

「――大好きだよ、ミズキ」

花火の煌めきが椿の幸せそうな笑顔を縁取つた。

恋多き女の子の可愛らしい笑顔を。

「私もよ、椿」

今日という花火と記憶に刻み込むように。

ミズキは夏の夜空に愛を打ち上げた。

そばにいるだけで、なんか幸せだつたな

「綺麗な景色だね!! たきな〜!!」

「はいはい。綺麗ですよ、千束」

「オラ、ガキンチヨども。もうじき着くわよ。荷物下ろす準備しつけよ〜」

若々しい青葉が赤く燃ゆる紅葉に変わる頃、山中を走るレクサスが1台。中は全員女性。目的は紅葉狩り兼キャンプというレジャーである。

事の発端はミズキによる秋キャンプに行くという話に、『やだやだやだ！ 私もどつか行きたい〜!! 先生！ 私も夏にどこにも行けなかつたから、どつか行きたい〜!!』

というか、千束の駄々こねにミズキがほとほと呆れて、聞くだけ無駄だと予防線を張つて椿に連絡した結果、二つ返事でOKが出ただ。

だからといって、千束を一人にしたら色々と邪魔をしかねないと、仕事以外に楽しみを見出していくいたきなも連れられて、キャンプに来たのだ。

「千束さんとたきなさんは食材持つてね。ミズキは受付を。残りは僕が持つから」

両肩両腕に荷物を抱えて、サイトに入る椿を追う千束とたきな。

重心がぶれる事なく、軽々と荷物を運ぶ背中を見て、たきなが、「…………実は、椿さんは元リコリスなんぢやないですか？」

「は？ 何言つてんの、たきな。椿さんはマジシャンでしょーが。第一私達海外に行くにはパスポート取らないといけないのに戸籍ないじゃん」

「ですが、18歳で卒業したりコリスは基本的に海外の情報組織やリコリスの海外支部に出荷されると聞いてます。千束クラスだと逆に日本に残されそうですが

「ええ！ やだやだ！ 私もアメリカ行きたい〜！ 自由の国でハンバーガー食べて、ウォール街行きたい〜！」

荷物を置いて、せつせとキャンプを設置し出す椿を見つつ、自分達のテントを少し離れた箇所に立てる。あまりに近くで、2人のいちやついてる声がしたら、あまりにも居た堪れないでの。

「話を戻しますが、椿さんが元リコリス。爆発の専門家ならば、マジシャンで活躍する傍らでそういうお仕事もしてるんじゃないですか？」

「ああ…………なくは、ないのかなあ。でもまあ、別に気にする必要はないでしょ。別に銃なんて持つてきて…………おい」

「…………熊が出たら、怖いので」

「…………ぜつてえ、抜くなよ？」

千束のドスが効いた低音にたきなは赤べこのように頷く。テントも無事設立した頃に、ミズキは漸く帰つて來たが、爽やかな景色とは裏腹に不服そうな顔だ。

「あ、椿さんに抱きついた。頭もぐりぐりして。傍目から見て恥ずかしくないのかね」

「千束も偶に私にやつてるので違和感ありませんが」

「アラサー女子がいやつくると女子高生がいやつくるのでは天地ほどの差があるのだよ、たきな」

「聞こえてつからな、ガキンチヨども!! 私はまだ27だ!!」

「僕もまだ25だからね？ アラサーではないからね？」

むすつとしたままの彼女は写真を撮る椿の背中に抱きつきながら、がなり声。年齢とあれば流石の椿も不服を表すかのように否定する……が、17・6のちさたきからすれば一回り年上なのは違いないので

「アラサーじゃん。おばさんじゃん」

「アラサーじゃないって言つてるでしょ!!」

情もない発言に椿ミズキの言葉は重なるのだつた。

\*

「という訳で釣りをしよう。せっかく川に近いキャンプ場なんだ。景色も綺麗だし、いい思い出になると思うよ」

「あの、ミズキさんは……？」

たきなが指を差した先、そこには既にビールを開けて飲みながら、胡瓜を無心で叩き割るミズキの姿。

あまりにも鬼気迫る顔に、千束も触れることなく、釣り竿を手に取る。

「管理人さんに『家族でキャンプ？　いいね！今ならアユが釣れるよ！』って言われたらしくて……」

「ああ……若作りの母親に見られたと。それでしたら、椿さんは旦那さんになるんですけど、いいんですか？」

「構わないよ。男装してるので、男性に間違われるのをキレたりしたら器が狭いだろ？　とりあえずミズキには自分のつまみを作らせてるから、おとなしい間に鮎を釣ろうか」

岩間に流れる水の瀬、澄んだ沢の音、加えて木陰は、そよぐ風のなんと涼やかで、肌に触れる水氣も、真夏の肌に張り付く湿気とは大違ひだ。

普段から都会の喧騒に巻き込まれていたリコリス2人にとっては弛緩剤のようなもので。知らず知らずのうちに肩に入っていた力が抜けて行くのを感じる。

「……贅沢な時間の使い方ですね」

「たまには息抜きも必要だからね。力を抜くことを忘れたら、いつかはくパン！って破裂しちゃうつて」

「千束は緩みすぎですので、もう少し張り詰めて……わつ」

直ぐに竿の先が微かに曲がつて、咄嗟にたきなは手首を引くけれども、重みは無い。水滴を滴らせて帰つて来た釣り針からは、綺麗に餌が抜き取られていた。

「やられましたねーたきなさーん」

「……まだ、餌はあります。絶対に千束よりは多く釣つてみせ——」

「おつ、また来た！　いいスポットじゃん、ここ！」

さつきよりも微かに軽い音に千束はほぼ反射で手首を引く。

今度は上手くかかつたようで、ぱしゃぱしゃと水面を跳ねるそれを、ゆっくり手繰り寄せる。

「どやあ」

「ドヤ顔やめてください。たまたまです。ビギナーズラックという奴です」

「おつ、なら勝負する？ 負けた方は3日間トイレ掃除。どうよ？」

「負けても罰ゲーム撤回しないでくださいね！」

意気揚々と煽る千束に乗つたきな、そのまま1時間の釣り勝負が始まると、せつせとたたき胡瓜を作っていたミズキからビールを取り上げる椿。

「ミズキ、飲み過ぎ。まだ昼過ぎだよ？ 後は夜になつてから」

「何よ、昼間から酒が飲める機会を取らないで欲しいんだけど？」

「夕飯はアヒージョで、それに合う高級ワインもあるんだけどなあ……」

「そのビールで終わりにするわ。休肝日つて大事よね！」

高速掌回転により、ミズキは最後のビールを飲みながら、バーベキューコンロでラムチョップを焼き始めた恋人を待つ。

クミンとローズマリー、岩塩で味がついたその焼き立てを口に運んで、感嘆の吐息を漏らす。

「赤身がむちむちで、脂身も溶ける♪ビールとの相性最高すぎない!?」「アメリカの友人にビールに合う肉つて紹介されてね。ミズキに食べて欲しくて頑張ったんだ。お次はジャークチキンだよ。スペイシーさが売りのジャマイカ料理さ」

クミンや塩、玉ねぎなどを混ぜて半日漬け込んだチキンを表面を香ばしく焼く事で出来たチキンを切り分けて、ミズキの皿に置けばがつつくように口に運んで破顔する。

「これはあれだわ、ラムコークが合う奴……！ 椿、ラムコーク作ってくれたりは〜」

「約束守れない子に上げる料理はありません」

「ですよね〜じゃあせめてコーラちようだい、コーラ。気分だけでもマリブ海を味わうわ」

「たつだいまー！ 千束帰りましたー！ という訳でたきな。トイレ掃除よろしくね！」

「何故、勝てないんですか……釣つてる箇所は同じはずなのに……」

ちさたき用に買ったコーラを勝手に開けながら、ジャークチキンをつまむミズキの元に正反対の2人が帰還。バケツごと4、5匹のアユを渡す千束を尻目に、ミズキは可哀想な物を見る目で

「そりや、あんた。千束の動体視力があれば引っ掛けた瞬間に吊り上げるなんて造作もないでしょ。じやんけんと一緒に負ける事がわかってる勝負ってこと」

信じられない顔で千束を見た後に、たきなが膝をつく音に千束は腰に手を当て、高笑い。微笑ましいやり取りを見た椿は苦笑いしながら、アユの下処理を開始する。

早速七輪に火を起こして、内臓を処理したアユに串を打つ。  
食塩をまんべんなくまぶし、パタパタと团扇で煽ぐと、香ばしい匂いが煙とともに立ち昇る。

「へえ…………つ！」

「美味しいそうな匂いがします…………！」

目を輝かせる千束とたきなが早く早くとうずうずする姿に苦笑しながら、椿は焼けた鮎を取る。

皮が少し焦げて、箸で押すとパリ、と崩れるほどになれば、ちょうどいい加減だ。

「……もう、いいんですか？」

既に捕食モードと化したたきなが、焦らされた猫のような目で串を取り。椿はどうぞ、と手で促して、他の鮎の処理に取りかかった。

他のは捌いて刺身にしてみるのもいいかもしない。持ち帰つて甘露煮でも…………と考えていれば何処となく刺さる視線。

「…………私のは？」

「まだ食べるのかい？」

「お酒がない分、食べたいのよ！ せつかくのバーべキューよ。食欲の秋よ！ 食べなきゃ損でしょ！」

「これ以上食べたら、夕飯入らなくなるだろう？　僕もミズキももう若くないんだから。脂っこい物食べたら夕飯要らなくなるくらいには胃も弱つてるだろう？」

「…………どうして、そんな酷い事言うの？」

「…………そうだね。なんでそんな事言つたんだろうね」

両者が自分の年齢と加齢に絶望している傍らでハムスターのようにアユを頬張るたきなど千束は自撮りで写真を投稿すると言う若々しさを発揮。更に沈むアラサー2人。

「炭の香りが香ばしくていいですね」

「ワタの部分まで食べられるの、新鮮ならではだよね♪」

和氣藹々とする2人の空気に当たられて、椿は自分の焼けた鮎を持つて彼女の口元に突き出す。

「何？」

「釣れるかなって」

ふりふりと、目の前で魚を揺らせばミズキも漸く察しがついたようで。沢の石を踏みならして、隣に寄り添う。肩と肩を押し比べるようにして、

「ミズキ、あーん」

「あーん」

したり顔で見れば彼女が本当に幸せそうに食べてる姿が見てとれた。

味わったミズキがこちらを見てにつこり笑うと、

『『幸せになりたかつたら釣りを覚えなさい』つて格言があるけどまさにその通りね。最初はクソくらえと思つていたけど』  
「誰から聞いたんだい、それ」

と、誰からそんな事を聞いたのか確信持つた表情で頷く。  
そのままミズキは自分の肩に頭を乗せてきて。

「さて、たきな。川遊び行こうぜ！」

「そうですね、お邪魔虫ですし、私たち」

酔っているからか、そそくさと川遊びに向かう2人を尻目に熱を持った彼女の肌に赤みが刺して、とろんとした瞳が椿を写す。

「普通の家族つてさ、きつとこんな感じなのよね。アンタが父親で私が母親。百歩譲つてあいつらが娘だとしたらさ……こんな平穏な日々をずっと過ごせるはずなのよね」

酔いによって口が軽いミズキに水を渡しながら、彼女の頬を撫でる風が椿のじわじわと赤くなる熱を覚まして行く。

好きな人との結婚を考えた未来に、照れないはずがないのだから。「これからのこと、それからのこと。もっと貴方と見ていきたいわ、椿」

「僕だつて……春も夏も秋も冬も君と生きていたいんだよ。だから、もつと楽しませてあげる。君が飽きないくらいに、ね？」

川のせせらぎを子守唄にミズキは眠りに落ちて行く。  
いつか見るありし日の未来を夢に見て。

# 開け放たれた蒼すぎる空、一粒の涙

「夜になりましたね、たきなさん」

「温泉気持ちいいですね、千束」

白く濁る湯の中で月夜を見ながら溶ける2人。

うら若き女子たち2人のために、椿とミズキは近くの温泉を探したのだ。幾らリコリスでもシャワー浴びれないのは精神にくるのだから。

もちもち雪見だいふくみみたいになつて千束の背後から、水面に波紋が広がっていく。振り向いた矢先にいたのはタオルを持つてお湯に入ろうとする椿の姿。

「やあ、ふたりとも。湯加減はどうかな?」

「さいこーでーす」

「ミズキさんはどうしましたか?」

「酔い覚ましてから入るつて。多分、今日はお風呂に入らないんじゃないかな」

肩まで浸かつた椿、男装しておらず、女性としてのありのままの肉体を曝け出しているが、ここには彼女の透き通る肌と、豊かな双丘に興奮するものはいない。

(ミズキが夢中になる訳だ……大人の色気つてのが見て分かる)  
「千束、どうかしましたか?」

「ミズキは色気ないなつて思つて」

不思議そうに首を傾げるたきなを笑つて誤魔化し、しばし柔らかく暖かなお湯の毛布を楽しんでいれば、たきなが思い出したかのように、

「そういうえば、ミズキさんと同棲始めたんですけど? ミズキさんが滅茶苦茶自慢してましたよ」

「言つてた、言つてた。閉店後の晩酌しなくなつて、速攻で帰るようになつたよね。愛しのダーリンが、ご飯作つて待つてるつて」

「うちのハニーが迷惑かけてすまないね。お詫びにアイスでも奢ろうか」

「ハニーの言葉に嫌らしさがないの、才能でしょ……」

同棲の話題を口にすれば目に見えて、彼女の口が速くなつたのが分かるし、表情も随分と和らいだ。当初はミズキのことを利用しているばかりと思っていたが、本気でミズキと添い遂げるつもりらしい。「ミズキといつ結婚するつもりなんですか？」出来たら後、2年以内が良かつたり？」

「なんで2年なんですか……」

「いやほら、もしかしたら私が日本にいない可能性あつたりするかもじやん。ハワイ挙式されてもブラジルとかだったらキツくない？」

「ファーストリコリスは基本的には日本だよ。出荷されるのは主にセカンドやサード達だ。電波塔の英雄なら日本で飼い殺しじゃないかな」

「千束には無用な心配で……っ！」

飛び交うはずのない単語を耳が聞き取るより、早くたきなは椿から離れるが、ここは浴場。銃もなければスマホもない。そもそも裸一貫でどう戦えばいいのだ。男もあるまい。

「…………いつから、気づいてた？」

「最初から。リコリス喫茶店の店長ミカさんは僕がセカンド時代の元司令さ。でもまさか恩人が2人もそこで働いてるとは思わなかつたけど」

「え、千束も気づいて、というかわかつてたんですけど!?」

「仮にもDAの古株だよ私。昔、悲惨な目に遭つてリコリス引退した工作兵がいるつて話も聞いたことあつたし。私が電波塔の英雄になつたおかげでリリベルにそういう用途にされるリコリスが減つたつて話もね」

何も知らないのは自分ばかりと、相方のしたり顔にたきなは不満顔だ。それを慰めるように千束は抱きつこうとするが、水鉄砲で反撃されて撃沈。

「まあ、そんなこんなで僕は女性しか愛せないというわけさ」

「そんな人からしたら、私らは格好の餌食では？」

「僕にだつて理性はある。下半身にしか脳がない獣とは違つてね。そ

れに今はミズキの体に夢中だし、恩人には手を出さないよ」

「私、上がった方が良さそうですね」

よくよく考えたら、同性愛者にじつくりと体を見られている事がわかつてそそくさと上がる準備を始めたときなに、千束は流石に苦笑い。ここまで邪な話をフルで曝け出す人なんていたのだろうか。

「千束さんは上がらなくていいのかな？　あの話を聞いて上がらないのはある意味、身の危険を感じてないというか……」

「いやいや、幾ら私でも身の危険感じたらそれなりには対策しますよ。でもこれくらいなら裸でもなんとかなるので」

「技術に裏打ちされた自信ってわけだね……羨ましいよ。昔の僕が今の中ほど強ければ……いや、そしたらミズキには出会えていかつた。ポジティブに考えていいこう」

月夜に咲く椿の花、立ち上がる彼女の肉体美とそのスタイルは月下旬美人と言うほかなくて。ミズキじゃなくても見惚れてしまうのは間違いない。現に千束でさえ、目を奪われかけたが、千束は別の方を見ていた。

「——いつ終わるか分からぬ人生だものね」  
全部知ってるさ、と語る彼女の瞳を。

\*

「trick or treat！」

「ノリノリね～ハロウインもう終わってんでしょう

「可愛いですね。千束。魔女ですか？」

温泉から上がったときなどミズキがキャンプで焚き火を眺めていれば、何故かコスプレした2人が襲来。

十中八九、主犯は椿ではあるのだが、ドラキュラをモチーフにした貴族スタイルが様になりすぎていて文句は消し飛ぶ。

女子高生らしく、魔女っ子コスプレした千束の可愛らしいハートマークを見てもたきなの表情は変わらない。褒めてはいるが、変わらないのはムカつくので、

「たきなは私の使い魔の黒猫つて事で!!」

「やりません!!」

流れるような動きで猫耳をつけられ、反撃しようとするたきなの手を容易く抑え、制圧し、水性マジックで髪を書いて、黒猫ガールたきなが完成。

ファーストリコリスの実力を無駄に活かした無駄な攻防だったが、いざ千束と写真を取り出せば、たきなも千束とノリノリで指先ハートマークを作り出している。

「さて、ミズキはどうする？ ゾンビメイクにするかい？」  
「……ちなみになんで？」

「いつも2日酔いでゾンビっぽいから」

「ニンニク入りアヒージョぶつけっぞ、エセドラキユラ」

ミズキが作るのはアヒージョ。オリーブオイルをたっぷりの鍋に投入して、冷凍タコイカ、ホタテ、ブナしめじ、トマトを加えて塩と胡椒で味つけて5分煮れば完成。

ニンニクはなし。同じテント内では毒ガスとほぼ同意義だからだ。椿は笑いながら、バゲットを切り分けて、クーラーボックスに入れていた安い赤ワインを取り出して、ジンジャーエールで赤ワインを割る。

「こちら、キティになります。お嬢様？」

「あら、お上手な伯爵なこと」

「千束さんとたきなさんは葡萄ジュースでいいかな？ ジンジャー エールもあるけど、辛口なんだ」

「私、ジンジャーエール！」

「私は葡萄ジュースでお願いします」

たっぷりの鍋に入ったアヒージョをつまみながら、葡萄ジュースを口に運ぶ千束たきな。

「何これ、美味しい…………」

「え、マジ？ たきな、一口！」

ワインはスーパーの安物だが、葡萄ジュースはイタリアのファンからいただいた芳醇な葡萄の香り、舌に残る僅かな渋みとさわやかな甘

みが絶品の代物。

千束も葡萄ジュースを一口飲むと、曇らせていた目を輝かせて、椿と葡萄ジュースに視線を行つたり来たり。

本当に美味しいものを食べると、黙つて目を白黒させてしまう。現にたきなの目はきらきらしつぱなしだ。

「さて……と」

「あら、珍しいわね。ビールなんて。アサヒ？ サントリー？」  
「ヴァイツエン。ドイツのビールだよ。ファンからのプレゼントさ」「なんか入つてんじやないの？」

「大丈夫。調べてあるから。さて、乾杯」

クーラーボックスに大量に入れた氷で冷やした生ビール。ぬるいのが最高と言われようと冷たいビールに勝るものはない、アヒージョをつまみながら、ビールを煽る椿。

「足りなかつたら言つてね。締めにオイルパスタでも作るから」「やつふあー！」

「口に入つたまま、喋らないでください。千束」

爽やかな秋の夜長を焚き火の暖かさと流れていく。

ゆつくりではあるが、大切な時間。時間に追われる普段の日常からかけ離れた贅沢な時間の過ごし方に、椿は満足そうに頷く。

「タコもイカもぶりぶりで美味しいー！」

「野菜もトロトロでいいですね。リコリコ喫茶店の新メニューにいかがですか？」

「新メニューなら、アンタのパフェあるじやない」

「あれはお蔵入りです。黒歴史つて奴です」

「パフェ？」

「実は、たきなが作ったパフェが……」

「千束!!」

焚き火の灯りに照らされて、夜空が見下ろす星の下。

非日常に身を置く者達が過ごす、かけがえのない日常。

楽しい時間が終わらないようにと願いながら、夜は朝へと向かつていく。

「…………椿？」

鳥の囀りと人肌の熱がない事に違和感を感じて起きたミズキは、手探りで眼鏡を探すと冷たい空気が満ちる朝の世界に足を踏み入れる。目的の人物はすぐそこにいた。香り立つその匂い、コーヒーを淹れて。

「おはよう、ミズキ。まだ寝てていいのに」

「目が冴えたのよ…………コーヒーちようだい」

澄み切った空気をたっぷり吸い込み、身体中に巡らせて漸く脳が機能したミズキはコーヒーを受け取って、朝露の椅子を拭いて座る。椿は静かにコーヒーを飲みながら、山の中腹をただぼんやりと眺めていた。

「ねえ、椿」

「なんだい、ミズキ」

「貴方――元リコリスでしょう？」

決定的な言葉、それを何故今なのか。それはミズキしか知り得ない事だが、少なくとも今でなければまた先延ばしになつてしまふと分かつていたからだ。

怖いもの、知りたくないもの、全てに蓋をして何でもないように笑つてしまえば、いつか来る試練に対応できないのもわかっていて。「戻と爆破を得意とした元セカンドリコリス。現在はマジシャンをしながら、爆破解体の訓練官も担当している。パートナーは楓。今は楠木司令の右腕、凄腕の狙撃手さ」

静かな世界に彼女の声だけが語りかける。ミズキはただ耳を傾けて、彼女の話を聞いていた。

「僕が戻と爆破で敵を追い立て、楓が仕留めるのが黄金パターンだった。リコリスで働くことはある種の親孝行だったし、それに対してもか思うことはない」

「…………でも、貴方はリリベルに誘拐された」

「——任務帰りで、銃弾も爆破物も尽きていた。そこに多勢で襲い掛かられたらひとたまりもないさ。『私』という花は散らされ、楓に助けられたのは1週間後だつた」

リコリスが電波塔事件が起きる前は扱いが悪かつた事はミズキでさえも知っている。リリベルからしたら、ただのおもちゃでしかなかつたのだろう。

結果、1人の女の子は壊れた。

魂を汚され、彼女の誇りは踏み躡られた。

「復讐も考えた……けど、電波塔事件に主犯達が出向いて抹殺された。その後は千束さんによつてリコリスの地位は盤石なものになつた。だから、千束さんは僕にとつてはある意味恩人のようなものなんだ」

寂しげな目にミズキは顔を逸らしたくなつたが、それは逃げだと涙を滲ませながら、彼女を見る。語りたくない過去を語るのにどれだけの勇気を出しているのか、計り知れないけどそれを受け止めたいから。

「幻滅……したかい？　君の恋人はとつくに汚されていたんだ」

「幻滅は、しない…………でも泣きたくはなつた」

「泣かなくていいさ。『椿姫』だつた『私』はもういない。渡米して過去を捨て、『椿』になつた『僕』が今はここにいる。他でもない君の言葉でね」

「……思い出したわ。ベッドの上で全てに絶望した女の子がいた事。私が情報局としてバイタル管理をしていた事もね」

今より若いとはいえ、そのくすみきつた瞳の色をミズキは忘れられない。下水のヘドロより汚れきつたその色は大人の誰でさえも理解できない色に染まつていたのだから。

けれどミズキは近づいた。

明日には死ぬかもしれない女の子を前にして、話せる事なんてわからきつていたけれど、笑わなくなつてしまつたその子の明日を考えて、

『泣いてるより、笑顔でいなさい！　人生笑えば、幸せな未来は自分か

らやつて来るわ！」

「今更ながら、臭い台詞よね……そんな言葉が本当に救いになつていたの？」

「なつていなかつたら、今頃僕はリコリストか、自殺していたからね。何でもない言葉だから救われた。名前も知らない人だからこそ、心に沁みた。それだけさ」

「…………するい人。それでこんな酒浸りな堕落しきつたお姉さんを嫁にしようとするなんて。貴方の人生狂わせた私が責任取らないといけないじゃない」

山頂から影が引いて、光が満ちていく。

暖かな太陽が、ミズキの前にあつた闇を消していつて。

「——椿。貴方のプロポーズ受けさせていただきます。貴方の人生を狂わせた、その責任を持つて貴方の人生を側で見てあげます」

「——ミズキ、いいのかい？ 男装してるし、まだ僕はリコリストだ。任務があれば人をまた殺すかもしれない。マジシャンとして多忙で復帰したら今みたいに関われないかもしない。だから」

「だから、私は貴方に相応しくない？ そんな弱音、こちらから願い下げよ。ばーか、貴方以外に私を嫁にするのに相応しい人物なんていないわよ」

ミズキに手を引かれて、椿が立ち上がる。陽光に照らされた彼女は日陰にいた椿を朝日の下に連れ出して。

「だから……不束者ですがよろしくお願ひします」

ミズキの承諾にひう、と椿の喉が小さく鳴った。

そのまま彼女は頬に手を当てて、堪え切れない涙をぽろぽろと流し始める。手を伸ばして、ミズキは彼女の美しい髪を梳くようにして撫でた。柔らかに柔らかに、優しく。

「いいの、かな。僕が……私なんかが、こんな嬉しいことばっかりもらつて。こんなに幸せな気持ちで、贅沢な思いで……好きな人と結ばれて……」

「今までが不幸だつたんだから、これくらいの贅沢は許されるわよ。受け切れないなら周りに分けたらいい。そん時は私も一緒にね」

言葉にならない彼女をミズキはゆっくり抱きしめた。  
椿を覆つた暗い夜は終わりを迎え、新しい朝が今、登る。

## 愛を込めて花束を

「ご注文の品だ。火傷には気をつけてな」

「ありがとうございます、ミカ司令」

「元だよ。椿。元気そうで何よりだ」

既に閉店時間がだが、ミカは最後に入ってきたお客様に自慢のコーヒーを振る舞っていた。千束と店を始めた頃には下手だった焙煎や淹れ方も随分と様になつて来た。

そして、かつての教え子がわざわざコーヒーを飲みに来ててくれる。それだけの時間が経つた事ともう時間がない事を暗に示していく。

「ミズキから聞きました。リコリコ喫茶店閉めるんですね」

「ああ。お前が来ている事は知っていたが、いつになつたら来るかどうか不安だつたよ。まさかこんなギリギリになるなんて思わなかつたくらいだ」

「気持ちの整理をつけたくて……でも、何とかなりそうなのです。後は家族にご挨拶をと」

喫茶店を閉める理由は楓から聞いていた。

千束の心臓、それが壊されて20歳までもたない事が原因だと。「ミズキさんと結婚させていただきます。同性婚になる為、色々と不便なことがあると思いますが……過去に比べたらなんてことはない」と笑い飛ばせる気がするのです

「ああ。いい機会だ。ミズキを引き取つてあげてくれ。ついでにくるみも引き取つてくれたらありがたい」

「新婚生活にいきなり子供はハードルが高いですね……」

リコリコ喫茶店を閉めた後、それぞれの道を歩んでいく事は決まつていた。たきなはDAに復帰、くるみは海外逃亡。そして、ミズキは椿との国際結婚だ。

「式はハワイであげようと思います。ミカ司令も誘いますので時間が合えば是非来てください」

「…………ああ、善処するよ」

その言葉に霸気がない。鍛えられた肉の鎧が気持ち萎びているよ

うにも見える。当たり前の日常が失われる。それの恐ろしさを椿は身をもつて知っているから、問いかけた。

「やはり、応えますか？ 実の娘のようなものですよね」

「だが、わかつていた事だ。決まっていた事だ………揺らいでいるのは私の覚悟だけなんだ」

「揺らぐなんて当然ですよ………貴方は千束さんの父親なんですから」

血が繋がつていなくても、そこには親子の情があつた。  
でなければ、ここまで悩むはずがないのだから。

血が滲むほどに拳を握りしめて、肩を振るわせる元司令にかけた言葉はそれだけだ。香ばしい香りの酸味が深いコーヒーを飲み終えて、彼女は小銭をカウンターに置く。

「僕は………幸せを掴みました。ミカ司令。貴方は千束さんに何をしてあげたいですか？」

「私は………千束を………」

「それがきっと答えですよ。今までお疲れ様でした。ミカ司令。僕は前へ進みます。気にかけてくださいってありがとうございました」

ベルを鳴らして、外に出る。

日本の冬を感じられるのも後少し、もうすぐ椿はアメリカへと帰るのだから。

\*

「さて、ミズキ。忘れ物はないかな？」

「大丈夫。くるみは？ あのでかいパソコンいいの？」

「構わない。元々アレはウォールナットを動かすための端末だからな。本体はボクが持つてる」

リコリコ喫茶店前に迎えに来た、椿の車にミズキとくるみは荷物を載せて乗り込んでいく。見送りは千束と店長だけだ。

たきなは今頃DAでの最終作戦に臨んでいるだろうから。  
「それじゃあ、千束さん。元気で………つて言うのはおかしいかな？」

後悔なき人生を。僕の恩人、電波塔の英雄さん

「椿さんもね、ミズキ泣かせたら、枕元に立つてやるから」

うらめしやくと手をぶらぶらさせる千束の言葉に、助手席のミズキの顔が曇るのを横目で見たが、どうする事も出来ず、別れの言葉を幾つか交わして、椿は車を発進させる。

空港までは1時間ちょっと、車内の空気は悪くはないが重たいものだ。椿が好きなジャズも雰囲気に合っていないので、消して窓を開ける事、数分。

「椿はさ、千束を助けてあげられないの？」

窓を眺めていたミズキの言葉は諦観が入り混じっていた。わかってはいるけど確認したい。そんな気持ちで。

「無理だよ。僕は医者でなければ研究者でもない。人を笑顔にする事だけしか出来ない人間だ」

「千束はさ、まだやりたい事あるはずなのよ。リコリス終わっても、あの性格なら人生謳歌して生きていくでしょうし、まだ知らない世界だつてあるもの」

「だけど本人が納得してしまってる。ああいう人物を変えるのは難しい。もつと生きたいじゃなくて、限りある人生を。の精神だからね。僕達が騒ぎたても諦めから受け入れてる」

「結局、私たちには無理だつてことか……」

「後はたきな次第だな。たきなが説得して……千束が折れるのか？」

「それこそ不可能だろう。たきなさんは千束さんに生きていてほしいけど、彼女の説得で折れるならミカ司令の説得で折れるから」

ああでもない、こーでもないと机上の空論、取らぬ狸の皮算用とばかりの会話を重ねてまともな解決策もなく、空港に着いてしまう。

もうここまで来たら、自分達に出来る事はないと気持ちを切り替えるしかないのだから。

「飛行機のチケットあんがとね〜くるみ」

「椿からの前払いのおかげだな。じゃなきや、ミズキだけはエコノミーだった」

「やーん、ダーリン大好きー！」

受付ロビーで飛行機を待つ時間さえも千束を救う手立てを考える中で、椿の携帯が震える。開いてみれば、それはショーの予約に内容の打ち合わせ。

「何それ。悪戯？」

「ショーの打ち合わせだよ。復帰予定日が近づいて来たからって気が早い人達だ」

帰つてから、まだ猶予があるとはいえ既に彼女の復帰を待ち望んでいる人が多くいるようで。椿が適当に返事しながら、スケジュール調整をしていると、アナウンスが入り、くるみが立ち上がる。

「それじゃあ、元気でな。ミズキと椿。結婚式には行けないが贈答品は送るよ」

「くるみもね、海外で捕まるんじゃないわよー」

「またね、くるみさん。良かつたら、いつか僕のショーに来てほしいな」

「………気が向いたらな」

今生の別れになるかもしれないが、あっさりした別れに少し拍子抜けした椿にもアナウンスが入る。ミズキと共に飛行機へ向かい、ファーストクラスの席に歓喜するミズキを見て、切り出すべきではないかもしないと考えていた言葉を口にする。

「ミズキ、本当にいいのかい？」

「………何が？」

「千束さんのことだよ。僕と一緒に来てくれるのは凄く嬉しいし、正直なところ浮かれてる気持ちもある。でも、後悔はしないのかい？」

「………今、ここで長年連れ添った妹分選んだら、憧れてた夢を捨てた後悔に苛まれるわよ。どつちにしろ、後悔するなら諦めざるをえない選択肢を選ぶに決まつてんでしょう」

話は終わりだとばかりにアイマスクをつけて、睡眠体制に入るミズキに椿は不満がありげだが、ミズキと千束の関係性に口を出すほど無粹でもない。

本人達がそれでいいならばと、何とか呑み込んで納得して、CAに

ドリンクを頼み、快適なフライトを楽しもうとシートを――

「あ、あのう……お客様？　お外にパパとママに捨てられた娘を名乗る人物が……」

「パパ？」

「…………ママ？」

ミズキもその声に起きて窓を開ければ、そこには金髪の美少女がスケブ片手に必死になつて訴えかける姿。

それを見た椿とミズキは顔を見合わせて笑つて、

「人違いです」

窓を閉じたが、今度はスマホをハックされて、無言のスタンプ爆撃が発動する。どちらにしろ、うざつたらしいことこの上ないのでミズキが電話をかけて、文句を言うが、暫くして、彼女は目を見開いた。「千束の心臓が！」　そう、わかつたわ。で、私はどうしたらいい？　うん……分かつた。要請をかけるわ。ただ行く前にちょっと待つて」「千束さんの心臓がどうかしたのかい？」

「…………吉松が人工心臓を持つてるらしいわ。今ならそれを取り返して千束を助けられる！　だから…………椿、私は」

ミズキの言葉が詰まる。彼女の目は苦渋の決断に葛藤が見えた。

だからこそ、椿は笑つた。彼女の選択が誰かを傷つけたわけではないと教えるように。

「行つておいで、ミズキ。大事な妹なんだろう？　それじゃあ、結婚式には呼ばなきやね」

「くくっ！　ありがとう！　椿！　行つてくる！」

触れるだけのキスをして、ミズキは息を切らして外に出て行つた。

残された彼女はドリンクを一口飲んで、ゆっくりとシートに体を預ける。

何も間違いではない。優先順位が違つただけのこと。

それでもちよつと悔しいのが、無くした乙女心で。

「待つのは慣れてるさ、ミズキ。君が帰つてくるのを心から待つてるよ」

そう言つて、彼女はゆっくりと目を閉じた。

「…………あのう、お客様。今度は貴方の元妻が、空港で騒いでるらしいのですが、心当たりは？」

「ないです」

\*

「君、頼むからああいうのだけはやめてくれないか…………マジシャンがスキヤンダルで消失マジックは笑えないって」

「それは言うけど、降りてくれて感謝するわ。椿。あつちもいよいよ大詰めなの。私たちをサポートに引っ張り出すくらいにはね」

「サポート？」

「貴方が見て、私が撃つ」

「つまりはいつもの黄金パターンって訳だね。OK。やろうか」

空港で騒いでいたのは元パートナーの楓で。

説明もほどほどに高速道路を飛ばす椿の車の後部座席では狙撃銃のメンテナンスをしている相棒がいて。

「貴方、爆弾は？」

「後部座席のシートの中だよ。火気厳禁だから、煙草吸わないでくれよ」

「吸つたことないでしようが。それと椿、貴方にやつて欲しいことがあるのよ。万が一の為にね」

運転中に語られたのは最悪を想定したリカバリーの手段。合理的だが、椿の名譽に少しヒビが入りそうなその立案はミカ司令と楠木司令によるもので。

「それ、僕が断るかもしれないこと考えてる？」

「断る訳ないでしよう？ 貴方だもの。断ればリコリスの地位はある頃に逆戻り。貴方と同じ人が生まれるかもしれないと考えたら……貴方は絶対断らないわ」

頭をハンドルにぶつけて停止。確実にこちらの地雷を理解して、椿にそれをやらせる為の方法を考えている。合理的だが、あまりにも人の心に理解がない。

「嫌な性格をしてるよね、リコリスは」

「だから日本は平和神話を維持できているのよ。椿。地図上の貸しビルに向かつて。準備は全て整えてあるわ」

「了解、相棒」

アクセルを踏み、目的地へかつ飛ばす。

過去の自分では出来ないことを、今の自分なら出来る。その活力が彼女を支える原動力になっていた。

だからこそ、その案を彼女は未来を賭けて遂行する。

過去に囚われるのではなく自分で充分だから。

\*

『レディースアンドジェントルメン！ 素晴らしい青空の下、よくぞ集まつてくださいました。我が子猫達』

延空木のタワーのテレビジョンに映し出されていたのは血塗れの男達が倒れていた姿と、赤と青の制服に身を包んでいた銃を持つ女子高生達。

これこそが真島の目的であつたりコリスの公表。それが達成された事に加えて、すぐ近くでサードリコリス相手に拳銃を打つなどが勃発。

結果としては、真島による作戦は成功したと言えるだろう。

——テレビジョンに映つた魔術師さえいなければ

『ゲリラマジックショーはいかがだつたかな？ 延空木によるサップライズパーティーの主賓として呼ばれて光栄だとも。おや？ 不安かな？ 演者達が巻き込まれていなかつて？ それでは子猫達、st and s up!』

テレビジョンに映し出されていたのは、先程爆破に巻き込まれていた空間に佇む魔術師。周りには夥しい血痕と汚れた制服に身を包んでいた女子高生にがたいのいい男達。

その魔術師が呼びかけ、指を鳴らすとまるで死者が蘇るように立ち上がつていくではないか。現実では間違なくあり得ない光景にて

レビジュン放送を見ているもの達は目を疑う。

『ソーサラー・カメリアに協力してくれた我が優秀な子猫達さ。僕の復活前夜としていかがだつたろうか？ 無論、僕が復帰した暁には延空木でのマジックショード控えている。さあ、皆、締めの挨拶といこう！』

立ち上がつた者達は血糊や傷跡シールで作り出された制服を見せびらかして、生きてる事を証明させる。ガタイのいい男たちも歯を見せて笑いながら肩を組むくらいには元気そうだ。

『この後、延空木でのマジックショード割引優待券を配布する予定だ。それではまたの機会にお会いしよう、BYE thank you！』

テレビジョンの向こう側で笑い合つての姿を見て、誰もが思つた。これはゲリラマジックショードであつて、現実で起きているわけではないのだと。先程の男も助手か何かだつたのだと。

まさか、日本ではそんな事起きたはずがないと皆が思つてゐるからこそ視線誘導。テレビジョンの放送が終わつた後、続々と先程の画面に写つていたベージュの制服の子達が段ボールを持つて、集まつてくる。

「皆様、延空木のサプライズパーティーはいかがだつたでしょうか。それでは今からチケットをお配りいたします。慌てずにお受け取りくださいませ」

アナウンスが入つて、集まつていた皆はチケットを受け取つて解散する。日付自体は半年後だが、それまで頑張る楽しみが出来たとほくほくしながら。

\*

「はい、カット!! ありがと！ 椿！ 何とかなりそう！」

「ラジアータに加えて何故かウォールナットの協力も入つたので、かろうじてですが！」

「楓さん！ 楠木司令から電話が入つています！ お繋ぎしますか

!?

「繋いで！　スピーカーで！　リコリス達！　即刻撤収！　チケツト入りのティッシュ持つてね！」

真島によるリコリス公表と同時刻、貸しビルのワンフロア。延空木に似せた部屋にグリーンバツクを仕込んだ空間にて、椿は仕事着に身を包んで、放送用のシーンを撮っていた。

いつリコリスの存在が明らかにされてもいいように彼女を起点としたフェイクニュース。まさかそれが使われる日が来るなんて本人達も思っていなかつたが。

『椿、楓。聞こえているな？　ご苦労だつた。迅速に撤収しろ』  
「楠木司令、僕のスポンサー達には上手くごまかしをお願いしますよ？　これで僕の地位が落ちたらこの手段は2度と使えなくなるので」  
『最大限の礼は尽くす事を約束しよう。感謝する、ソーサラー・カメリア。貴様をマジシャンとして表舞台に立たせた事は間違つていなかつた』

スピーカーから聞こえた楠木司令の言葉はいつものようにぶつきらぼうだつたが、それでも何処か安堵を浮かべたまま通信を切る。

ガタイのいい男たち（椿の部下）に荷物を運ばせて、楓達も即刻離脱し、引っ越し業者に扮して離脱する。

「これで何とかなるかい？」

「何とかするわよ。助かつたわ。本当にありがとう」

「いいさ、リコリスの地位が揺らがないならそれでいい」

引っ越しトラックの中では会話する2人を割く電話の音。宛先は椿にとつて愛しい人で。

『椿!?　アレ何!?』

「D.A.の隠蔽工作に協力しただけさ。なんてことはないよ。そつちは

?　千束さんの心臓はどうなつた?」

『私は無事。心臓は……千束が逃したわ』

「………そつか。分かつたよ」

電話を切つて、深く息を吐く。

恩のある組織に報いる事はできたが、恩人は救われなかつたその事

実が酷く重くのしかかつて來た。

マジシャンとしての影響力を得た事で、何かが変わった気がした。

大好きな人と結ばれて、何かを変えられた気がした。

それでも助けられない人達がいる。笑顔にできない人がいる。

それが何より、エンターテイナーの自分を苦しめる。

「楓。結局、僕らはあの頃に比べたら変わったのかな」

ぼんやりと呟いたその言葉はトラックが揺れる音に紛れていたが、

対面にいた楓にはしつかり聞こえていて。

「変わったでしょ。だから、昔よりはたくさんの人を助けることが出来るようになつた。だけどね、所詮一人が救える人なんて限られてるものよ」

リコリスが2人組が基本なのは、互いに足りない箇所を補う為だとミカ司令に教わったことがある。事実、楓と椿は互いに足りない箇所を補つてここまで死ぬことなく、生きて来られた。

「だから、仲間が友がいるんでしよう？」 最強のリコリスであろうとそれは同じ筈。彼女にも優秀な相棒が仲間がいるはずよ。だから貴方が心配なんてしなくとも何とかなるものよ」

最強のリコリス、それを救う姿は確かに相棒の彼女に重なつていって。椿は押し殺した声で笑つてしまふ。

いつから自分はそんなに傲慢になつたのかと、調子に乗りすぎな自分がおかしくて笑つてしまふ。

彼女は、自分の恩人には自分以上に優れた仲間たちがいる。

自分が無理に何かをしなくともきつと何とかするくらいに。

「そうだね、楓。なら僕は招待状を書いて、待つだけだ」

ハッピーエンドの知らせ、その幸福の調べを。

「おっじやましまーす!!」

「…………え、と。何でここに？」

真島によるテロの後、椿は渡米してマジシャンとして復帰していた。やはりと言うべきか、延空木の件について色々詰められはしたが、最終的には納得して貰つて肩の力が抜けたところだ。

そして、半年間、彼女は世界を股にかけてマジックショーを行つていたのだが、その傍らに大好きな人はいない。

『千束が失踪したのよ。店長が心臓を手に入れたから、死ぬ心配はないんだけど…………あいつも式に呼びたいからもう少し待つしていくくれない?』

お互に近況が落ち着いて交わしたラブコールの内容はそんな約束だった。呆れた彼女の申し訳なさげな言葉に椿は勿論二つ返事でOKした。

千束が生きてる事はいい事だし、彼女を結婚式に呼びたい理由も分かるからだ。それに結婚自体、根回しにもまだまだ時間がかかる。

同性婚も昨今に比べれば比較的に受け入れられてはいるが、忌避する者たちもまだ多い。

それを納得させる為にも時間をかける事は必要事項だつたのだが……あろう事か、ミズキが探してるであろう千束が目の前に現れば王子様の仮面なんて容易くズレてしまつて。

「スケジュール見ましたよ～暫く厄介になります！」

「う、うん? いや、よく僕が借りてるホテルの部屋がわかつたね」

「最近のS N S 舐めてはいけませんよ～暫くしたら出ていくのでそれまでお願ひしますよ～」

「まあ…………いいけどさ。僕もショーアゲ终わつたら出ていくよ? 近日には」

「いいですいいですって。私もバイト見つけたら、部屋借りるんで。

その前に少しお話がしたくて。入つていいですか?」

断つても入つて来るのは間違いないので、部屋に招き入れる。わざ

わざ沖縄五つ星スイートルームを借りてたことが功を奏したようだ。持参したコーヒーの粉でコーヒーを淹れて、ベッドで跳ねる千束に差し出せば、彼女は興奮した趣で、

「いや／＼ミズキも幸せものだな／＼こんなお金持ちで優しいイケメンと結婚できるなんてさ／＼」

「逆だよ。ミズキが僕を選んでくれたんだ。ミズキなら幾らでも引くて数多だつて言うのに」

「アレが？ ナイナイ。しかし、ミズキが結婚か／＼」

コーヒーをサイドテーブルに置いて、使つてないベッドの上をゴロゴロする千束。あまりにも遠慮がないが、その振る舞いは何かを誤魔化すように見えて。

「ねえ、椿さん」

「うん？ 何だい？」

「結婚つてさ、どんな気持ち？」

投げかけられた他愛ない質問。だとしても何かを悩んでいるような彼女の言葉に、椿もまた少し、思案して、

「今は正直浮かれてるね。どんな未来が待つてんだろう、楽しいことがあるだろうつて」

「でも楽しいことばかりじゃないわけでしよう？ ミズキや椿さんの心臓が急に止まつたりしたら？ いつ何が起きて当たり前がなくなるかもしれないじやん」

そこまで言われて質問の本当の意図に椿は気づいた。

「……迷つて いるのかい？ 自分がこれからどうすればいいか

「……やつぱり、何か聞いてたりする？」

「ミズキからは簡潔にね。それで、悩んでるのか。何が出来るか、何をしたいかに」

「最初はさあ…………ああ、死ぬんだなつて思つて死に場所探してたんだよね。半年くらいして？ あれ、私、死なねえな？ ってなつて。ひとまず行きたかった所に来てみたわけですよ」

まるで捨てられた子猫みたいに彼女は自分の居場所を探しているのだ。急に与えられた未来を前に怯えているただの少女がそこにい

た。

かつての自分とは違うとしても、悩みの方向性は同じもので。

「それじゃあさ、書いてみようか」

「書く？ 何を？」

『やりたいことリスト』だよ。『最高の人生の見つけ方』って映画は知ってるだろ？」

メモ用紙を渡して、10個の丸を書いて渡す。

ミズキに慰められた自分も作ったこれから的人生でやりたいこと、したいことリスト。それを希望に今まで生きて来た。

「何でもいいんだ。恋愛をしてみたい。海外に行きたい。無謀でもいい。書きたいものを書いてごらん」

渡したメモを受け取つて、彼女は思案してペンを走らせる。端末を見て、考えて、昔を思い返して、記していく。

その小さな未来予想図は数時間後に完成して。

「出来た！」

「どれどれ？」

- ①ハワイで綺麗な海とフラダンスを踊る
- ②ハリウッド俳優にサインをもらいたい
- ③映画の舞台となつた場所を巡りたい
- ④リコリコ喫茶店を再開したい
- ⑤恋愛をしてみたい
- ⑥成人式に出て振袖を着る
- ⑦ラスベガスでカジノをやりたい
- ⑧世界一美味しいパンケーキを食べる
- ⑨オーロラを見てみたい
- ⑩誰かの役に立つてみたい
- ……

「ほんとが海外になつちやうからさ、多分無理だとは思うけどね

「無理だなんてまだ早いよ、千束さん。僕だつてマジシャンになれるなんて、リコリス時代は誰も信じていなかつたらいいだ」

頬を搔いて、照れたように言う千束に椿は優しい声で語りかける。

出来るわけないと誰もに思われた自分が夢を叶えて、今はここにいるのだから。

「後、数年すればリコリスは卒業だ。そこからは君の人生が始まる。歴代最強の名前を使えば、こんな夢を叶えるくらい安いものだよ。だから——未来を見るのを怖がらないでほしい」

怖がつて怯えた未来には、幸せで笑っている自分がいたと過去の自分に言えるくらいには彼女は今の未来に来れてよかつたと思つている。

だからこそ、自分の恩人にもそうであつて欲しいと願うくらいに。「だね……その日その日を楽しんでいけば後悔なき人生が送れるつてわけか。ちょっとゆっくり考えてみるよ。時間はあることだしね」ある種の納得が出来た彼女は穏やかに笑つて、立ち上がり、スリッケースを開いて、取り出したのは水着。

「というわけで、沖縄に来たから海を満喫してきます！　ありがとうございました！　椿さん！」

「着替えなら一階だよ」

「ラジャー！」

復活した千束は浮き輪と水着を片手に廊下に飛び出して行く。椿は彼女の明るさを取り戻した事を嬉しく思いながら、携帯を取り出して、

「ああ、ミズキ？　今、沖縄に千束がいるんだけど……誰か迎えに来れない？」

あっさりと彼女を売ったのだった。

\*

「今でも半年前に椿さんが私を売つたことは許さない」「……今からその人と結婚する人間に言う事か？」

何処までも行けそうなその夏空の下、集まつた人数から何らかのイベントを思わせるその中に、白いタキシードに身を包んだ絵本の王子様のような椿がいて。

彼女は来てくれたスponサーや俳優達、友人のマジシャン達と挨拶を交わして新婦を待つ。

そして、その新婦は現在雰囲気に合わせた純白のウエディングドレスを纏きを着て、マリッジブルーに苛まれていた。

「顔、真っ青ですよ。ミズキさん」

「うつせえ……分かるだろ、なあ、なあ！」

「あんなにベタベタしてた癖に間近になつて逃げるんだから」

「千束が言えたセリフじやないですけどね」

可愛らしいフリルがあしられ、白の髪を後ろでポニーtailに纏め、露出は極限まで抑えられているが上品な印象と、彼女の素の美しさを引き出したドレスと同じように顔色は真っ白だ。

「結婚が嫌なわけじやありませんし、むしろ喜ぶべきでは？」

「今更になつて、自分が釣り合うかどうか悩んでるんだよ、このアル中は。遅すぎない？」

「遅すぎねえよ、やばい……心臓が口から出る」

「一生のメモリアルになりそうですね」

外から歓迎のベルが鳴つて、開始の時間が間近に迫る。千束もたきなもそれを聞いて、ニマニマとした顔で控室を出ていき、代わりに入つて来たのはダンディさを溢れ出す初老の男。

「まさか店長が父親代わりね……」

「不服か？ ミズキ？」

「まさか。父親代わりできるのはアンタしかいないでしようし……」

腕を組んで外に待つ椿の元へ向かうミズキとミカ。バージンロードを歩くミズキとミカに会話はない。こんな時に気が聞いた会話ができるほど2人とも余裕はなくて。

「ミズキ」

外に出る扉を前にして、ミカは腕を外してミズキの背中を押す。

その時に呼びかけた小さな声は、オーケストラの生演奏にかき消されながらも、確かにミズキの耳には届いていて。

「——幸せに、なれ」

開いた扉の前に振り向いたミズキが見たのは頬を濡らすミカの姿で。それに釣られて泣き出しそうになるミズキは深く息をついて、前を向く。

待つてはいるのだから、これから先も数えきれないほどの思いをいつまでも送り続けて行く最愛の人が、手を差し出して待つてはいる。

ずっとずっと先も繰り返し、手を握つてそばにいてくれる伴侶が。

「綺麗だよ、ミズキ。惚れ直した」

「何回目よ、もう………」

相変わらず無邪気な君の笑顔が夏の日差しよりも輝いていて。

貴方の横顔に見惚れている暇もなく、式は滞りなく続していく。

「指輪の交換を」

英語で言われたその言葉に従つて、指輪が薬指に嵌められる。これから先、見る度に思い出す幸せの象徴、運命の糸がその手に繋げられたのだから。

「では誓いのキスを」

ベールを優しく上げた先には見慣れた顔の彼女がいて。だけどその顔にはちょっとばかり余裕がなくて。仕方ないのだけど、何だから少しもおかしくて、微笑んで彼女を待つ。

それは、一瞬にも満たないけれど確かな熱を交換して、湧き上がる拍手と舞い上がる花吹雪が、彼女の花嫁になつた事を表している。

いまだに実感が湧かないけど、優しく手を引く椿にミズキもまた泣き笑いながら、歩いて行く。

50年後の未来もきつと、世界中の誰よりも、貴方と2人でこの先も歩いて行くと確かな予感に身を包まれながら。

\*

「結婚おめでとう、ミズキ。疲れてるようだな」

「どーも、司令。そりや、旦那の知り合いが映画やらドラマやらで見た顔ばかりだと血の気が引きますよ！ 見知った顔にどれだけ安堵する事か」

「よくわからないが、幸せそうなら何よりだ。仕事はどうするつもりだ？」

「暫くはハワイでリコリコ喫茶をやりますよーだ。椿のショリーにはなるべくついていきますけどね」

「そうか。D Aとしては特に言うことはない。幸せにな」

わざわざ来てくれた事に感謝はしつつも、何かしらの圧を感じる楠木司令を終えて、次に来てくれたのはフルーツジュースを持った金髪の少女。

「ママ」

「おいバカ、やめろ。冗談じゃ済まなくなるだろ!?」

「というのは置いといて。ミズキ、千束とたきなの戸籍は貸しにしく。良かつたな、行き遅れにならなくて」

「減らず口ばかりか！ もうちよつと祝え！」

「冗談だ。結婚おめでとう、ミズキ。夢が叶つて良かつたな。ところで椿は何処だ？ お色直しか？ それと服、変えたのか？」

金髪の少女ことくるみが不思議そうに問いかけたミズキの服は先程までの純白のウェディングドレスはまた違う黒を基調としたシックなタキシードを纏っていた。

「待つてんのよ、私の妻をね」

髪をアップにして、出来る女を醸し出す彼女が見る先、建物の扉が開かれて、照れたような声の彼女が腕を引かれて飛び出して来る。

「や、やつぱり似合わないって、楓！」

「ぐだぐだ言わないの！ セつかくの一生に一度のイベントなのにウェディングドレスを着ないのはおかしいでしようが！」

「だからって、お色直しで着なくても！」

「うるさい！ つべこべ言わずに来る！ ほら！」

マーメイドラインを主体としたパンツルックのウェディングドレスとは真反対の茹で蛸のように顔を真っ赤にした椿は相棒に連れられて、立ち上がったミズキの胸におさまった。

「あ、み、ミズキ……」

「あら、可愛いわね。いつもと雰囲気が違つて、綺麗だわ。今まで見て

「来た誰よりも」

「う、あ、う……」

大好きな人に歯の浮くような台詞のオンパレード。自らが言う分には構わないのに、新妻に立場を逆転されて、言われるのがどれだけ恥ずかしいかは椿の花みたい耳まで真っ赤な彼女が語つていて。

「椿。私は移り変わりゆく季節をこの目で貴方と眺めていたい。貴方とならどんな色も景色も愛する事ができそうだもの」

「も、勿論さ、ミズキ。僕も君となら、何処へだつて楽しめる……」「そうね。輝く星のような貴方となら、数えきれないほどの願いも夢もいくらでも叶えていけると信じて行けるわ。だから——」

ミズキは彼女の手を掴み、跪く。

何度も隠れて練習した成果は、酸素を求める魚のように口をパクパクさせる椿の姿に表れていて。

「私の妻になつてくれない？ 椿。貴方を愛してるわ」

直球すぎる愛言葉に、最早頷く以外の感情表現を失つた椿が首が取れそうに領いたのを確認して、ミズキは椿の手の甲にキスを落とす。

まるで演劇のようなシチュエーションに千束は騒ぎ立て、周囲も釣られて口笛を吹き出し、歓声が上がる。

「はあ、慣れない事はするもんじやないわね。どう？ 椿？ 記憶した？」

「……記憶回路が焼かれた気がする」

パタパタと胸元を仰ぐ彼女にミズキはしたり顔、歳上の威厳は果たせたとばかりに椿の腰を抱き寄せて、

「私も一緒よ。アンタに脳味噌焼かれたんだから。責任とつてよね」

照れくさそうに呟くミズキに椿もまた、ミズキの指先に自らの指先を絡めて寄り添つて

「責任くらい取るよ。だつて——いつも『私』の深いところに貴方がいるんだもん」

王子様の仮面を取り去った一人の少女の言葉にミズキは穏やかな笑みを浮かべて、キスをして、椿が持っていたブーケを投げるよう背面を押した。

「せーのっ!!」

可愛らしい掛け声と共に投げられた愛がこもった花束が空を舞う。孤を描いて、飛んだ先、その先にいるのは、与えられた未来に怯えていた少女がいて。

「よつしやあ!! 私のものー!!」

これから先、彼女もまたその目に映る景色全てが光のない闇の中を映す事になるかもしない。けれど悲しみに怯えて逃げ出しそうになつたとしても、

「おめでとうございます。千束」

そばにいる誰かの言葉に救われるかもしれない。

他でもない貴方の言葉に救われた彼女だからこそ、ある種の確信がそこにはあつて。

「ミズキ」

「何? 椿」

花が咲くような笑顔の彼女は、幸せを噛み締めるように、「これから先も——私と一緒に歩いてくださいね」

繋いだ心を離さないと、強く手を握りしめていた。